

敷島町文化財調査報告 第15集
(山梨県)

末法遺跡 III

民間宅地開発に伴う古墳時代の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
有限会社 総信

敷島町文化財調査報告 第15集
(山梨県)

末法遺跡 III

民間宅地開発に伴う古墳時代の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
有限会社 総信

序 文

敷島町の南部は荒川によって形成された扇状地形を成し、平成5年に行われた『遺跡詳細分布調査』ではこの南部地域に多くの遺跡が分布していることが明らかとなりました。

近年この地域では頻繁に開発が行われるようになり、敷島町として埋蔵文化財の保護が急務となってきています。

未法遺跡は平成5年の分布調査によって包蔵地として登録され、平成12年に民間開発による調査で、はじめてその存在が明らかとなりました。

ここに報告いたします第3次調査では、古墳時代の遺構をはじめ、縄文時代から中世までの幅広い遺物が出土をし、新たな歴史を提示する結果となりました。

今後は、調査で得られました成果を後世に伝えるとともに研究、教育、生涯学習の資として多くの皆様に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、有限会社総信及び地権者の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力を頂いた関係各位にお礼を申し上げ序といたします。

平成16年3月

敷島町教育委員会

教育長 山口正智

例 言

- 本書は山梨県中巨摩郡敷島町大下条地内に所在する末法遺跡（第Ⅲ次）の発掘調査報告書である。
- 本調査は宅地造成に伴って、敷島町文化財調査会が主体となり実施した。実務は同調査会より委託を受けた株日本窯業史研究所が調査員を派遣し、調査会として行った。
- 調査は試掘調査を敷島町教育委員会小坂隆司が担当し、平成15年1月15日～同年同月20日まで行い、本調査を三輪孝幸が担当し、平成15年3月31日～同年5月2日まで行った。
- 本書の執筆・編集は第1章を大嵐正之（敷島町教委）、小坂、その他を敷島町教育委員会・同文化財調査会の指導のもと三輪が行い、倉田有子の助力を得た。遺構写真は図版2-3B号住居跡、図版3-4号住居跡は大嵐、他は三輪が撮影した。また、遺物写真は河野一也が撮影・現像・焼付けを行った。
- 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは敷島町教育委員会で保管している。
- 調査組織は次の通りである。

調査組織

調査指導・主管 敷島町教育委員会

調査主体者 敷島町文化財調査会

調査事務局 敷島町文化財調査会

調査担当者 三輪孝幸（株日本窯業史研究所）

- 発掘調査と報告書の作成にあたり、次の方々より御教示を賜った。ここに御芳名を記し、感謝申し上げる。
中込司郎、坂本美夫、羽中田壯雄、畠 大介（敷島町文化財審議会）、芹沢清八、篠原祐一（跡とちぎけん生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）、水野順敏、河野一也、渡辺 務（株日本窯業史研究所）（順不同、敬称略）
- 調査・整理参加者（敷島町文化財調査協力員）
青山制子、飯宝久美恵、石川弘美、大久保久美、長田由美子、小林明美、小林素子、岡本芳子、高添美智子、堤 吉彦、穂坂美佐子、保延 勇、望月典子、森沢篤美（敬称略）

凡 例

- 住居内の遺物の出土位置は、個体の判明するものについてP口番号で取り上げ、位置とレベルを記録した。それ以外の土器片については住居を4分割し、北東方から時計回りにアルファベットをふって取り上げた。
- 挿図の北は磁北を示し、レベルは標高を表している。
- 挿図の縮尺は遺構が住居・溝1/60、土坑1/40。遺物は土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、土製品が1/3、中世土器・陶器・船載陶磁、石製模造品・原石・フレークが1/2、石鎌が2/3、打製石斧・磨石・砥石が1/3、石皿が1/4、管玉・ガラス小玉が1/1である。
- 遺物観察表の寸法は上から口径、器高、底径を示し、数値の（ ）は復元寸法である。
- 遺物番号は本文・挿図・観察表・図版で統一してある。
- 挿図に使用した記号は以下の通りである。

遺物出土位置

土器 • 石 • ガラス小玉 *

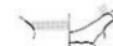
焼土

炭化物

拓本



赤彩の範囲



目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	1
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 周辺遺跡と歴史的背景	1
第2章 遺構と遺物	6
1. 壁穴住居跡	6
2. 方形周溝墓	17
3. 土坑	18
4. 溝	18
第3章 その他の出土遺物	20
第4章 まとめ	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	第14図 4号住居跡・出土遺物
第2図 調査区位置図	第15図 5号住居跡・出土遺物
第3図 全体図	第16図 2号方形周溝墓
第4図 1号住居跡	第17図 2号方形周溝墓出土遺物
第5図 1号住居跡出土遺物	第18図 1号土坑
第6図 2号住居跡	第19図 1・2号溝
第7図 2号住居跡出土遺物 (1)	第20図 調査区内出土遺物分布図
第8図 2号住居跡出土遺物 (2)	第21図 調査区内出土遺物 (縄文1)
第9図 3A号住居跡	第22図 調査区内出土遺物 (縄文2)
第10図 3A号住居跡出土遺物 (1)	第23図 調査区内出土遺物 (弥生・古墳・古代)
第11図 3A号住居跡出土遺物 (2)	第24図 調査区内出土遺物 (中世)
第12図 3B号住居跡・出土遺物 (1)	第25図 特殊遺物 (土・石・ガラス製品)
第13図 3B号住居跡出土遺物 (2)	

表 目 次

第1表 1号住居跡出土遺物観察表
第2表 2号住居跡出土遺物観察表
第3表 3A号住居跡出土遺物観察表
第4表 3B号住居跡出土遺物観察表
第5表 4号住居跡出土遺物観察表
第6表 5号住居跡出土遺物観察表
第7表 2号方形周溝墓出土遺物観察表
第8表 調査区内出土遺物観察表 (縄文1)
第9表 調査区内出土遺物観察表 (弥生)

第10表 調査区内出土遺物観察表 (古墳)
第11表 調査区内出土遺物観察表 (古代)
第12表 調査区内出土遺物観察表 (中世)
第13表 調査区内出土遺物観察表 (土製品)
第14表 調査区内出土遺物観察表 (装身具)
第15表 調査区内出土遺物観察表 (模造品)
第16表 調査区内出土遺物観察表 (縄文2)
第17表 調査区内出土遺物観察表 (石製品)
第18表 調査区内出土遺物観察表 (原石)

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景（南東から）	北調査区全景（西から）
	中央調査区全景（南から）	南調査区全景（西から）
	1号住居跡（南東から）	1号住居跡遺物出土状況（西から）
	2号住居跡遺物出土状況全景（南から）	2号住居跡全景（南から）
図版 2	2号住居跡貯蔵穴（南から）	2号住居跡遺物出土状況（南から）
	3 A号住居跡遺物出土状況全景（南東から）	3 A号住居跡全景（南東から）
	3 A号住居跡遺物出土状況（南東から）	3 A号住居跡遺物出土状況（西から）
	3 A号住居跡遺物出土状況（西から）	3 B号住居跡全景（南東から）
図版 3	4号住居跡全景（南から）	5号住居跡全景（北から）
	5号住居跡遺物出土状況（東から）	2号方形周溝墓全景（南東から）
	1号溝全景（西から）	2号溝全景（東から）
	作業風景	調査参加者
図版 4	1号住居跡出土遺物	
図版 5	2号住居跡出土遺物（1）	
図版 6	2号住居跡出土遺物（2）／3 A号住居跡出土遺物（1）	
図版 7	3 A号住居跡出土遺物（2）	
図版 8	3 B号住居跡出土遺物／4号住居跡出土遺物	
図版 9	5号住居跡出土遺物／2号方形周溝墓出土遺物	
図版10	調査区内出土遺物（縄文1）	
図版11	調査区内出土遺物（縄文1・2）	
図版12	調査区内出土遺物（弥生・古墳・古代）	
図版13	調査区内出土遺物（中世・土・石・ガラス製品）	

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源として南流する荒川によって形成された緩やかな南傾斜の扇状地形である。敷島町は扇状地の扇頂部分に位置し、荒川を挟んで対岸は甲府市となる。この一帯の西側には、盆地北西部にそびえる茅ヶ岳によって形成された赤坂台地が南北に延びており、JR中央線付近において終息する。この台地の西側には大河釜無川（富士川）が、また東側には小河川賀川が南流する。

一方、周辺北側はこの扇状地形の背後を担うように片山が東西に伸び、さらに片山の東端から南側へ舌状に湯村山が張り出す。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字形に取り囲まれ、しかも南側の盆地に向かって開口し、まるで天然の要害を形成するかのような特殊な地形をおり成している。

このうち、荒川の右岸に位置する敷島町は、町域南北約17 km、東西約4 kmと南北に細長い町である。本町はおおよそ北部の山間地帯と南部の扇状地域に大別されるが、町域のほぼ8割は標高1,704 mを測る茅ヶ岳や曲岳、太刀岡山などの山間地帯（一部丘陵）からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形上にある。東には荒川、西は賀川が流れ、東西を河川で挟まれた地域となる。この扇状地上には、南北に二つの微高地（自然堤防）が走っており、この微高地上に古代からの生活の営みが連綿と続いているのである。

2. 周辺遺跡と歴史的背景（第1図）

近年頻繁に発掘調査が行われている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期には稀である埋甕炉を有する縄文時代前中期の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれ、1987年の中央高速自動車道建設による第I次調査で住居跡計8軒（前中期1軒、中期7軒）、さらに第IV次調査で住居跡1軒と竪穴状遺構1基が確認された。

また、松ノ尾遺跡の第III次調査でも中期中葉にあたる住居跡1軒が確認されているが、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できているのは現在のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡⑧があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。これまでにVI次に渡る調査が行われており、弥生時代の住居跡33軒、方形・円形周溝墓24基をはじめ、南北の集落跡を二分すると考えられるV字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物は、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出上していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

また、第VI次調査では遺跡の外側を巡るとみられる環濠跡も幅3m、長さ55mに渡って確認されている。

古墳時代 これまで7遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡①などが上げられ、各遺跡ともS字形の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（I次）では落込み内から水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点が、末法遺跡（II次）では1号住居跡から緑色凝灰岩質の加工途中の管玉1点と剥片類が出上し、該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡（IV・VI次）でも該期の多くの遺物が出土しており、とくにIV次調査では本町で初めての発見と

なる前期の周溝墓が 2 基確認されている。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡①でそれぞれ住居跡 1 軒がみられる。

末法遺跡（I 次）は 1 号住居跡から甕、壺、高杯、杯などが出土し、しかも器種とその量が充実している。

金の尾遺跡（IV 次）1 号住居跡と御岳田遺跡（I 次）2 号住居跡でも甕、壺、杯、高杯が出土している。

後期の甲府盆地北西部では、6 世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。代表的なものに荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳(4)や県内で 2 番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)が存在し、この頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6 世紀末～7 世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・湯村古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉町・竜王町）が取り巻くようになる（第 1 図●印）。

町内においても戦後間もない頃、4・5 基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳(29)と大庭古墳(30)が存在するのみである。ちなみに、松ノ尾遺跡の第 I・II 次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれてきた土砂と考えられる黒色包含層中から須恵器の甕、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏡、鉄鏡、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるものがあり、中には災害により流されてしまった古墳もあったと考えられる。

当時の人々が暮らしていたとみられる住居跡は、現在松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されてきており、周辺遺跡の発掘状況から比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。とくに、第 I、II、V 次調査では、住居跡が複雑に重複して確認されており、しかも第 II 次調査では一辺約 7 m、第 V 次調査で一辺約 8.5 m と約 8.0×6.0 m、第 VII 次調査でも一辺約 7.7 m を測る大型の住居跡が発見されている。

そして、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西部に天狗沢瓦窯(6)が構築され、操業を開始するようになる。出土した瓦や須恵器等から 7 世紀後半（白鳳期）に位置付けられ、県内最古の瓦窯である。

この時期に併行する集落跡は、松ノ尾遺跡で徐々に確認されてきているが未だその数は少ない状態である。さらに犬狗沢瓦窯跡で焼かれた瓦が供給されたであろう寺院跡も残念ながらまだ発見されていない。

しかし、近年松ノ尾と村続遺跡③で布目瓦などの出土がみられ、今後両遺跡での更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 该期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも 100 軒以上に上る。

これまでの調査成果をみると、奈良～平安時代初め頃にかけての遺構は未だ発見例は少なく、むしろ平安時代中頃～末頃にかけて急激に増加をみせる。10・11 世紀ごろの集落跡が主体を占めている。

松ノ尾遺跡⑤はこれまでの 7 回の調査で住居跡 37 軒と竪穴状遺構 10 基が確認され、次いで周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡①などでもその分布の広がりがみられる。

一方、町南部の北側では、山宮地遺跡⑨、原腰遺跡⑩などがあり、村続遺跡③では調査面積が約 300 m² と狭小であったが計 36 軒の住居跡が発見され、大規模な集落跡の様相を呈することが分かってきている。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器と墨書き土器をはじめ須恵器、縁軸陶器、灰釉陶器などの陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などがある。特殊なものには、松ノ尾遺跡で円面鏡(4 個体分の破片)、銅製の帶金具などがあり、しかも 10～12 世紀の早い段階から中国産「貿易陶磁」がもたらされていることが最近明らかとなってきた。器種としては碗、皿、水注などの類が出土している。

平安時代末頃には、原腰遺跡、村続遺跡、松ノ尾遺跡、御岳田遺跡、不動ノ木遺跡などで集落が営まれている。中でも、松ノ尾遺跡は金銅製小仏像 2 身、村続遺跡では銅製小仏像の台座が 1 身出土しており、これらはその出土状態や共伴遺物、文様・鋳造方法などからおおよそ 11～12 世紀代の所産とみられている。

中世 该期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡⑤と山宮地遺跡⑨の 2 遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第 VII 次調査において一辺約 5.2 m、最深部約 40 cm を測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が 1 基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土していることから、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。この石組遺構の周辺にはビット群があり、近接したビット内から仏像頭部にみられる螺旋 1 点が出土している。

第1図 運跡位置図



- (1) 大字
 (2) 町
 (3) 里
 (4) 丁目
 (5) 住居表示
 (6) おとづれぐさ公園
 (7) 七色の花公園
 (8) 水辺の風景
 (9) 花菖蒲園
 (10) 二輪車道
 (11) 循行バス専用道
 (12) 循行バス専用道
 (13) 循行バス専用道
 (14) 大字字内道路
 (15) 六千字内道路
 (16) 伏木中学校
 (17) 伏木小学校
 (18) 伏木幼稚園
 (19) 伏木保育園
 (20) 伏木公民館
 (21) 伏木郵便局
 (22) 伏木警察署
 (23) 伏木駅
 (24) 伏木川
 (25) 伏木川
 (26) 伏木川
 (27) 伏木川
 (28) 伏木川
 (29) 伏木川
 (30) 伏木川
 (31) 伏木川
 (32) 伏木川
 (33) 伏木川
 (34) 伏木川
 (35) 伏木川
 (36) 伏木川
 (37) 伏木川
 (38) 伏木川
 (39) 伏木川
 (40) 伏木川
 (41) 伏木川
 (42) 伏木川
 (43) 伏木川
 (44) 伏木川
 (45) 伏木川
 (46) 伏木川
 (47) 伏木川
 (48) 伏木川
 (49) 伏木川
 (50) 伏木川
 (51) 伏木川
 (52) 伏木川
 (53) 伏木川
 (54) 伏木川
 (55) 伏木川
 (56) 伏木川
 (57) 伏木川
 (58) 伏木川
 (59) 伏木川
 (60) 伏木川
 (61) 伏木川
 (62) 伏木川
 (63) 伏木川
 (64) 伏木川
 (65) 伏木川
 (66) 伏木川

山宮地遺跡では、近年 15・16 世紀代に相当する遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第Ⅰ次調査ではカワラケや古銭などが出土した竪穴状遺構 1 基や土坑などがあり、さらに第Ⅱ次調査において竪穴状遺構 4 基、土坑 14 基が発見されている。とくに後者の調査では、竪穴状遺構から計 17 点の銅製仏具類がまとめて出土している。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の靈場であった金峰山信仰の登山口であったようである。

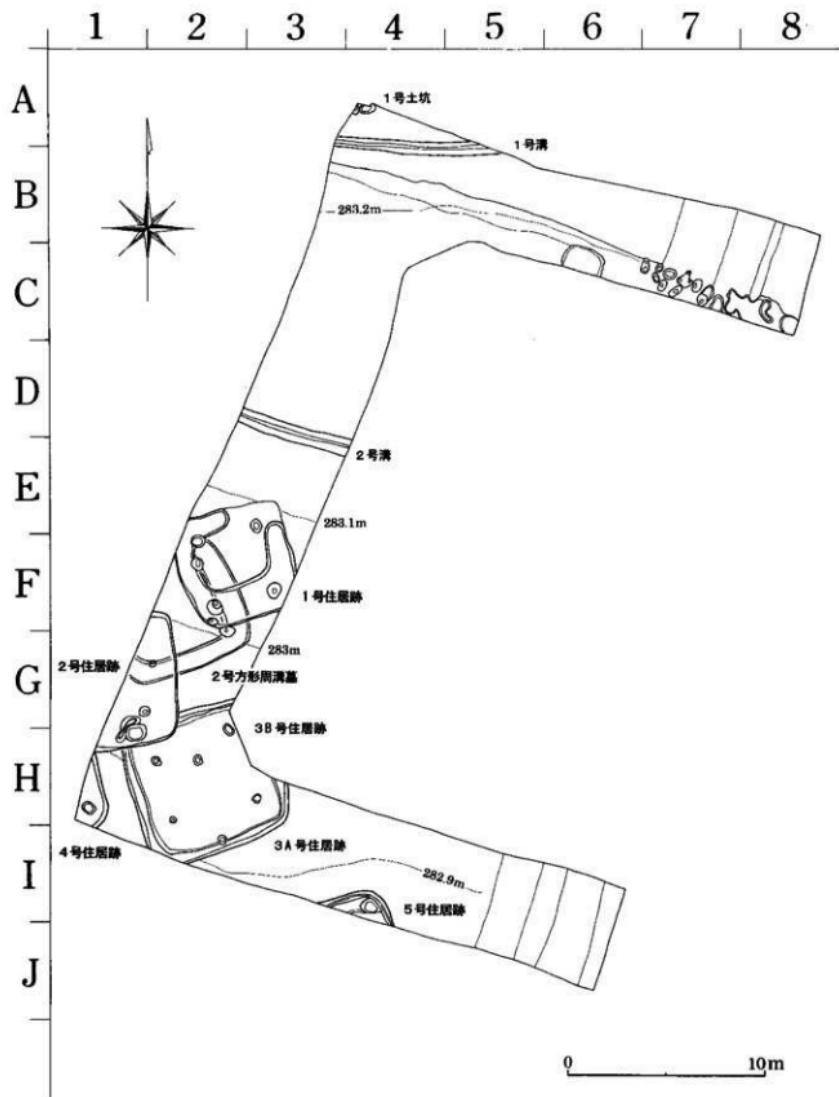
また、第Ⅲ次調査でカワラケと古銭が埋納された計 32 基にのぼる土壙墓群も検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきた。

本遺跡の東脇には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部では字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣藏昌恒」屋敷跡(66)が存在したという記述もみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えいく上でも今後重要な地域であるといえよう。

このように、近年の発掘調査の成果によりこれまで判然としなかった敷島町内の各時代の様相が徐々に明らかになりつつある。今回報告する末法遺跡についても、最近の調査で古墳時代前期から中期にかけての集落跡の存在が詳らかになってきた。以下、末法遺跡の第Ⅲ次調査についてみていただきたい。



第 2 図 調査区位置図



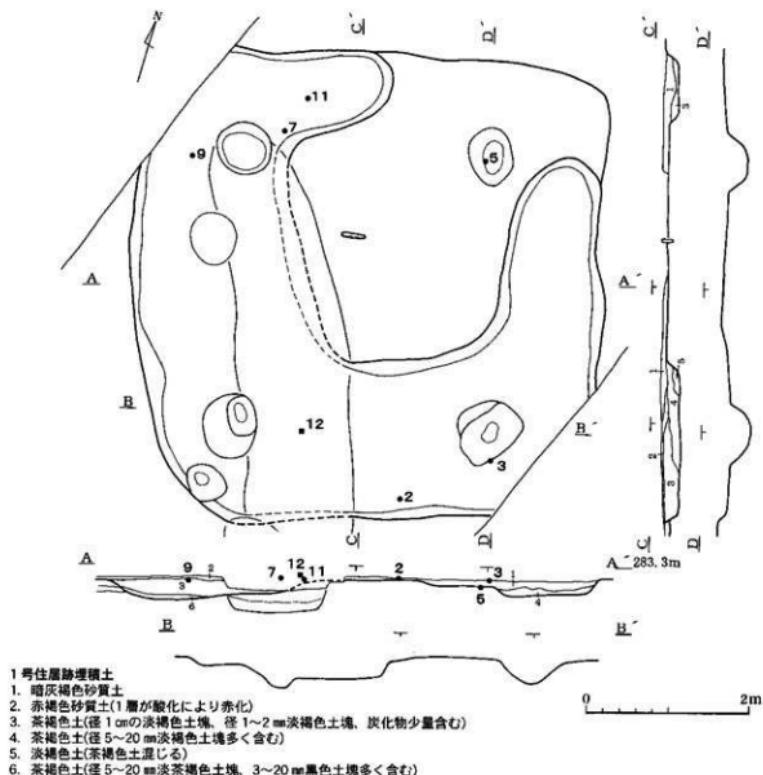
第3図 全体図

第2章 遺構と遺物

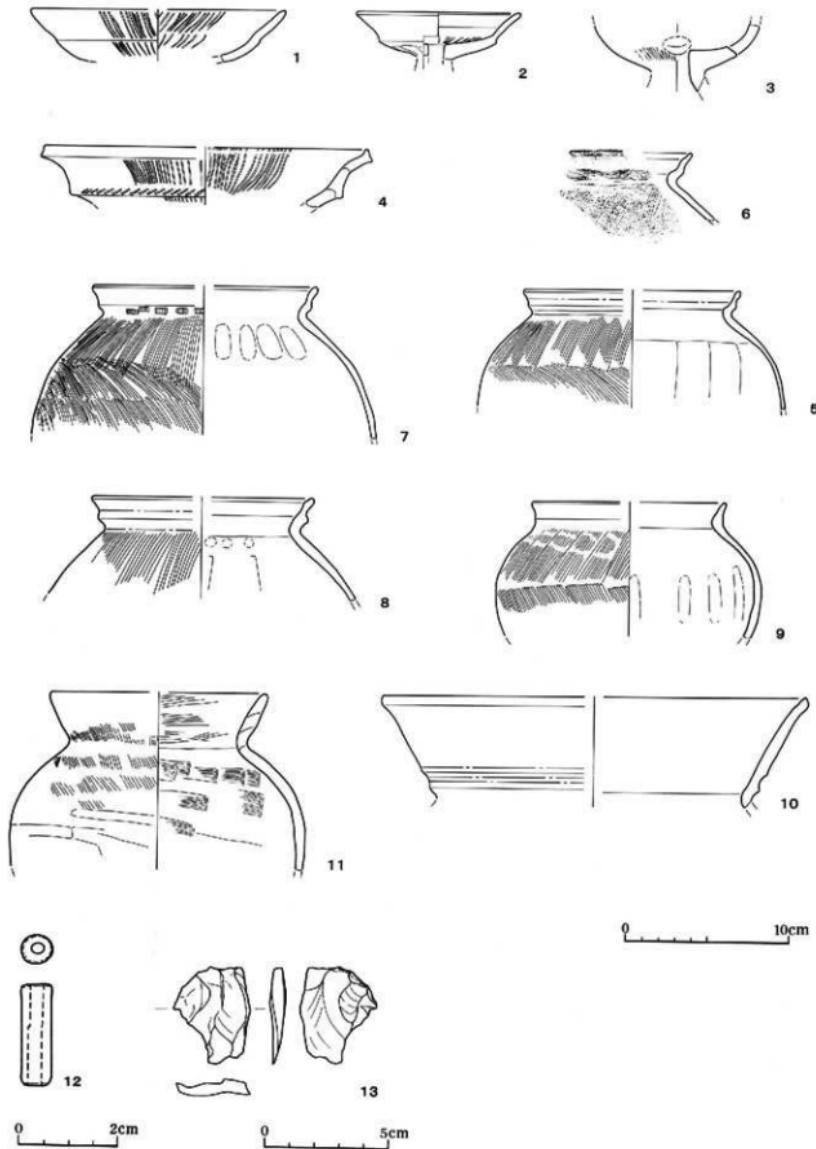
1. 壊穴住居跡

1号住居跡（第4・5図、第1・14・18表、図版1・4・13）

本跡は中央区の中央、E・F-2・3グリットに位置し、上面が削平されている。住居は北西隅、南東隅が調査区外に延び、南西部は2号方形周溝墓を切っている。平面形は隅丸方形で、規模は南北5.8m、東西5.7mである。主軸方位はN-16°-W。床面は軟弱で北東隅が削平された。外周には幅1~2m、深さ11~22cmの溝が廻っている。ただし、溝の埋積土中では貼り床などの痕跡を認めることはできなかった。溝中の四隅に小穴を確認し、柱穴と推定される。大きさは径53~80cm、深さ26~33cmである。中央には長さ30cmほどの川原石が床面に埋め込まれていた。周囲に焼土は認められなかったものの、川原石に被熱の痕跡が認められたことから炉と推察される。遺物は北壁際の確認面付近で土師器台付壺(7)、壺(11)、南側で土師器器台(2)が出土した。また、管玉(12)が南西側の埋積土上層から出土した。遺物は遺構上面を覆う包含層より多くの上師器小片が出土したが、遺構の埋積土中からの出土は僅かであった。



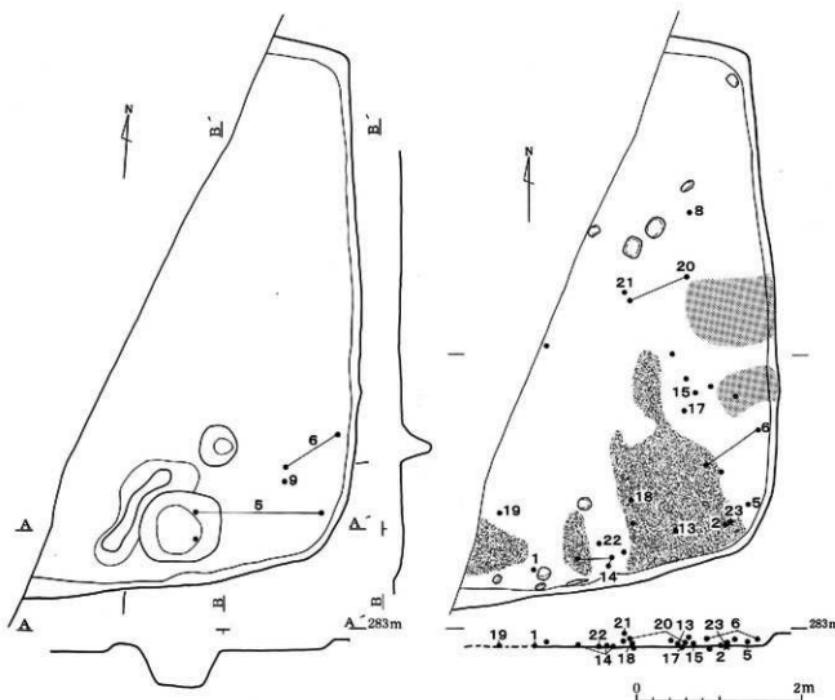
第4図 1号住居跡



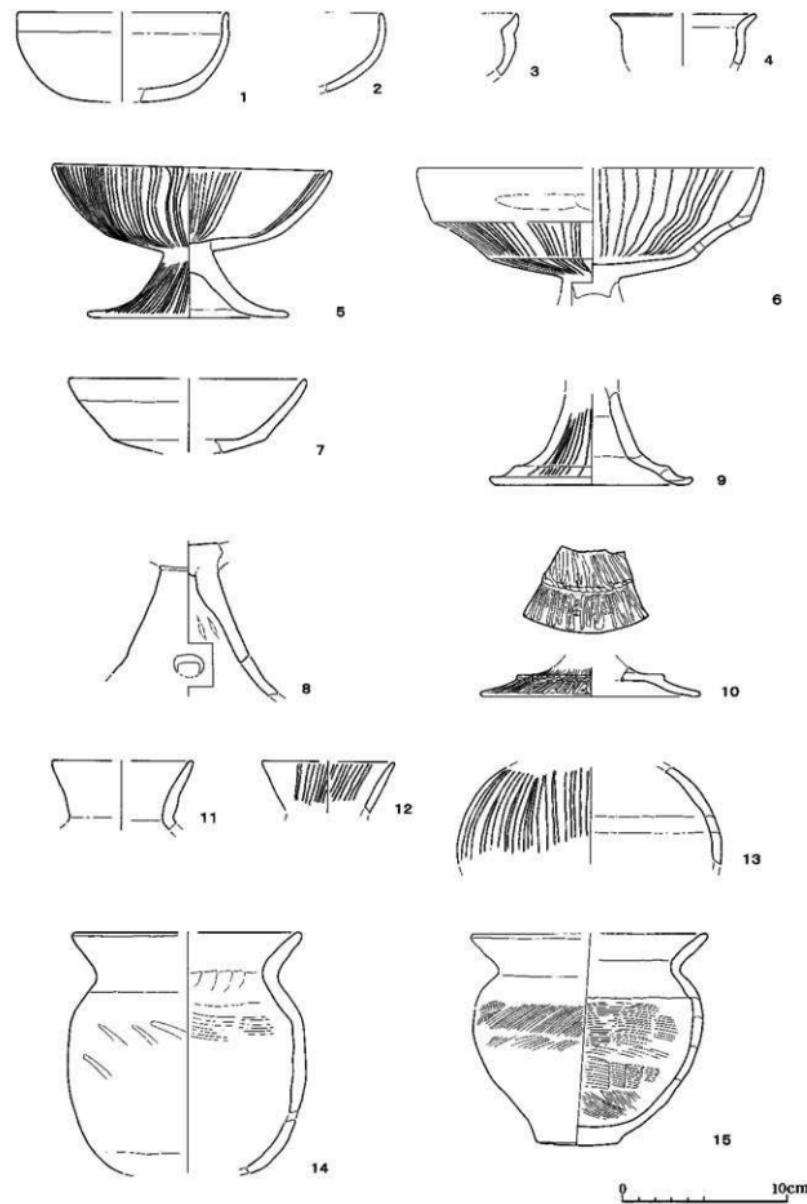
第5図 1号住居跡出土遺物

2号住居跡（第6～8図、第2・14表、図版1・2・5・6・13）

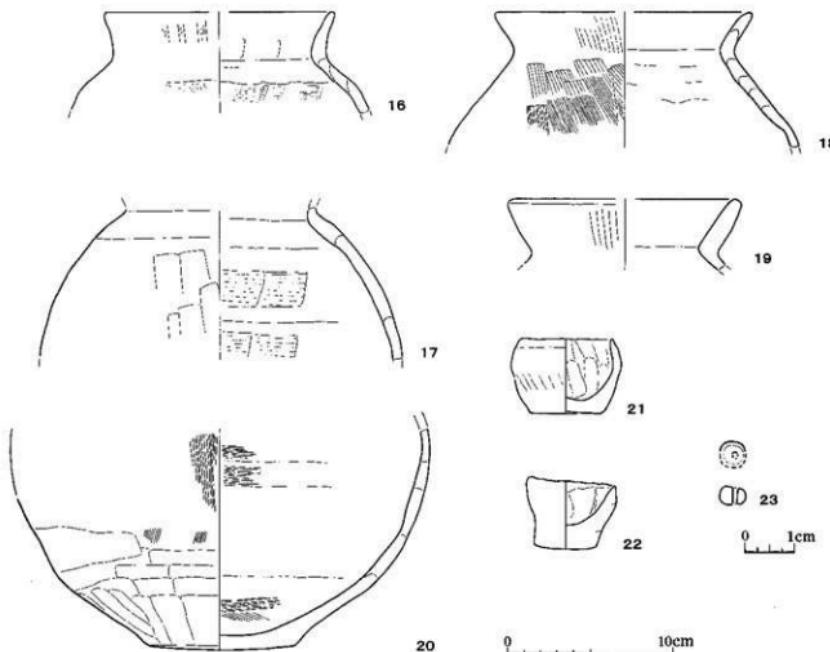
本跡は中央区の南西隅、G・H-1・2グリットに位置し、3A号住居跡と2号方形周溝墓を切っている。また、4号住居跡と接するも調査区内では新旧を確認することはできなかった。全体の約2分の1が西側調査区外にあるため全容を認めることができなかった。平面形は北東隅が直角に近く丸みを持たないが隅丸形と推定される。規模は南北6.5mで東西は南壁で3.7mを確認した。主軸方位はN-5°-W。確認面からの深さは13～15cmで壁は緩やかに外反する。床面は硬化面を認めることができず、表面はやや凹凸があるもののほぼ平坦であった。南東側で柱穴と推定される小穴を確認した。大きさは径45cm、床面からの深さ48cmである。柱穴の南西側には貯蔵穴が設けられ、平面形は方形、大きさは100×90cm、深さ46cmである。また、貯蔵穴の西側に幅35～40cm、高さ8cmの隆帯が認められる。住居跡の埋積土は暗灰褐色土の単層で径5～10mmの淡黄褐色土塊を少量含んでいる。また、東壁側中央には多量の焼土を確認し、南側の床面では炭化物が認められた。炭化物は細片化しており、大形の炭化材は認められなかった。ここから出土した遺物は多少の火、熱を受けていた。本跡は焼土・炭化物・遺物の状況から、住居廃絶後に火災にあったものと推定される。遺物は、高壙(5)は壙部が南東隅の床面より出土し、脚部が貯蔵穴より出土した。また、南東隅の炭化物層下から半分に欠けたガラス小玉(23)が出土した。



第6図 2号住居跡



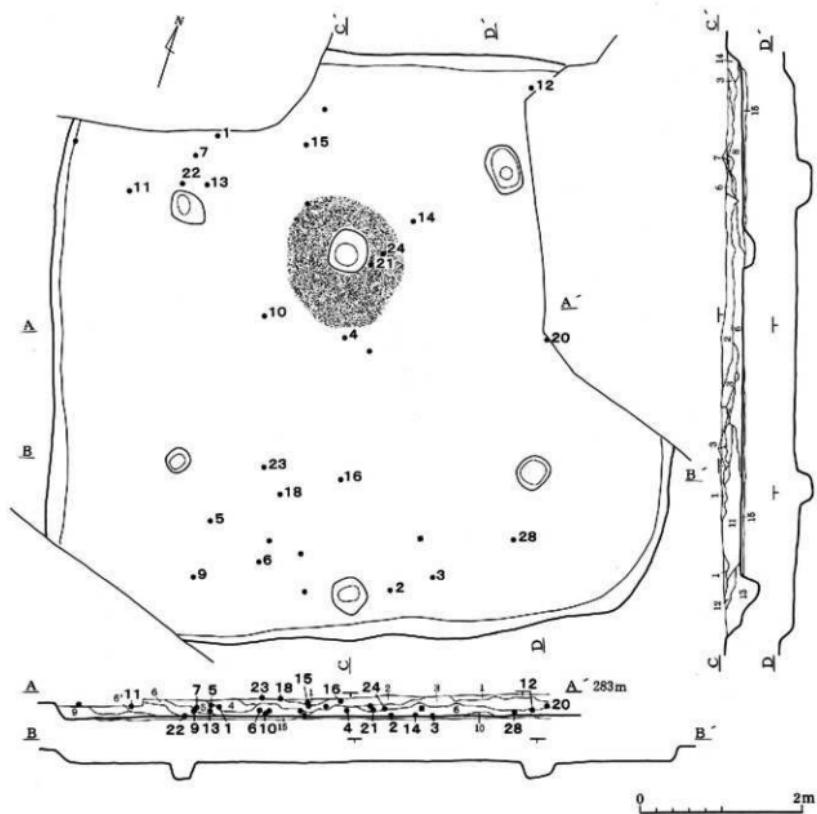
第7図 2号住居跡出土遺物 (1)



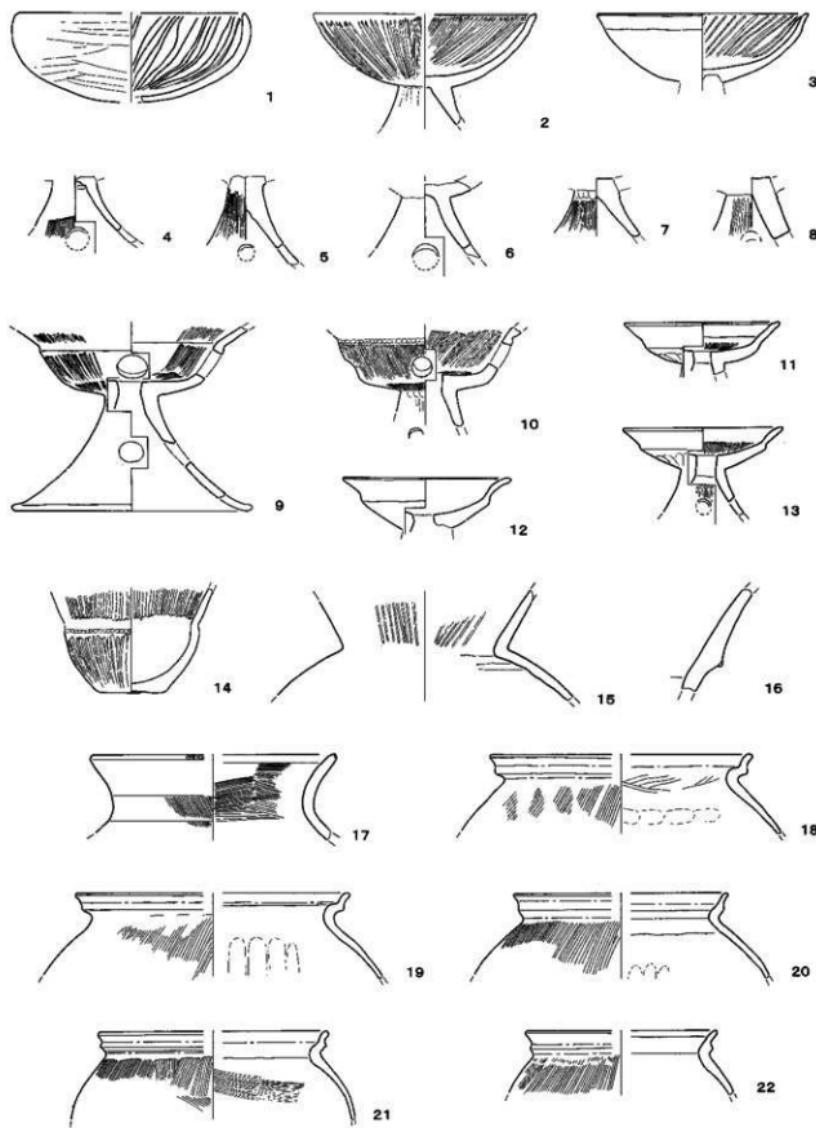
第8図 2号住居跡出土遺物（2）

3 A号住居跡（第9～11図、第3・17表、図版2・6・7・13）

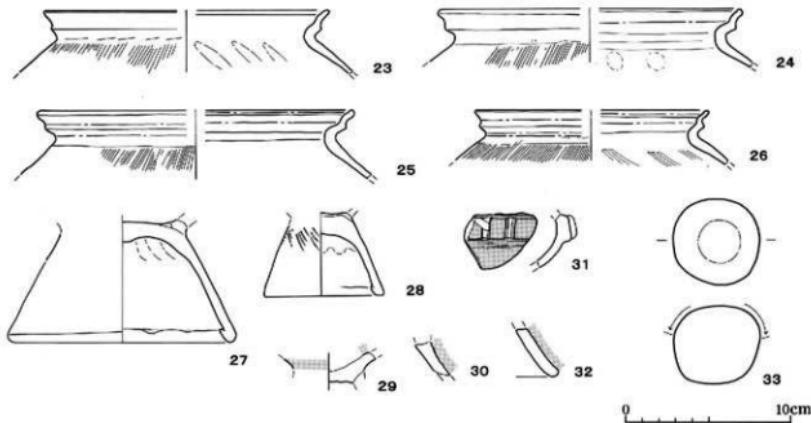
本跡は中央区の南端、南区の西端、G～I-1～3グリッドに位置し、2号住居跡に切られている。また、下位には建て替え前の3B号住居跡が重複している。平面形は北西隅が2号住居跡に切れ、北東・南西隅が調査区外であるが、ほぼ隅丸方形と推測される。規模は南北7.3m、東西7.6mと今次調査で確認した最大のものである。主軸方位はN-18°-W。確認面からの深さは平均18cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は3B号住居跡を埋めて造られ、厚さ2～4cmほどの貼り床が認められた。また、3B号住居跡にかかる部分以外のところでは地山を掘り残している。床面の状況はほぼ平坦で、貼り床部分が硬化している。床面には柱穴が4口、南側中央には出入り口部と推定される小穴1口を確認した。柱穴は径30～40cm、深さ19～47cm、出入り口部の小穴は径45cm、深さ20cmである。また、中央北寄りに径50cm、深さ14cmの掘り込みを確認した。その位置から炉と考えられるが、焼土や焼けた部分は認められなかった。この掘り込みの周囲、径150cmの範囲の床面上に炭化物を確認した。埋積土は淡褐色土を含んだ灰茶褐色土を主体とし、人為的埋め戻しが東側から行われたものと判断された。遺物の多くは床面直上と床面上10cmから出土し、破損品が多く完形品は認められなかった。遺物の中には多少の火・熱を受けた物があることや埋積土中に炭化物がやや多く含まれることから、住居廃絶後に住居内で廃材を燃やすような行為があったものと推察される。



第9図 3 A号住居跡



第10図 3A号住居跡出土遺物 (1)



第11図 3A号住居跡出土遺物(2)

3B号住居跡(第12・13図、第4・18表、図版2・8・13)

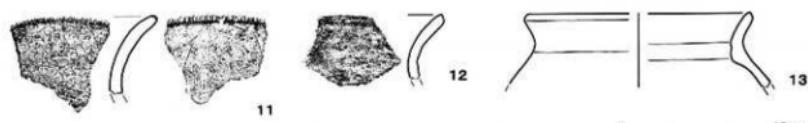
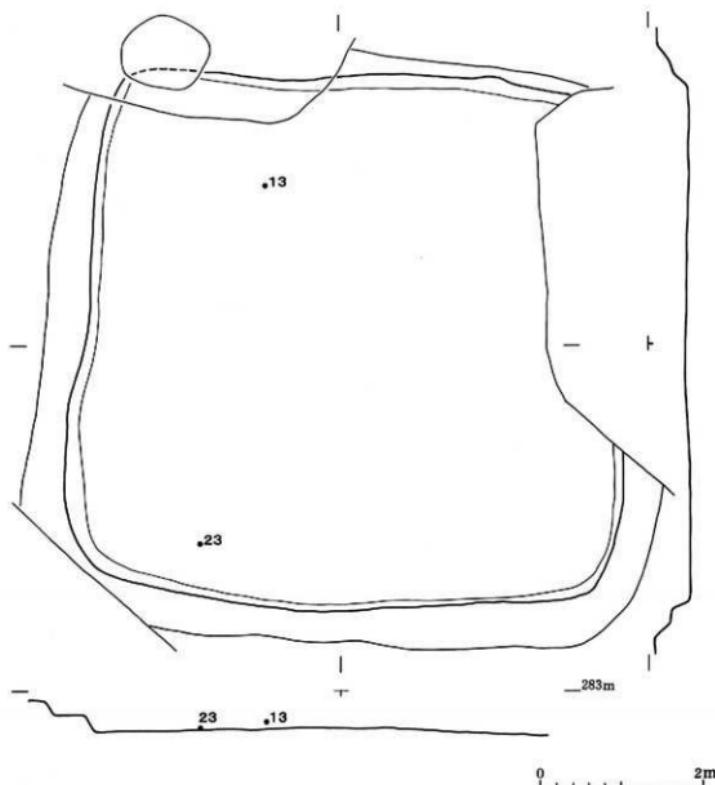
本跡は中央区の南端、南区の西端、G-I-1-3グリットに位置する。3A号住居跡の建て替え前の住居である。3A号住居跡と同じく北西隅が2号住居跡に切られ、北東隅が調査区外に延びている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北6.6m、東西6.8mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面より深さ45cmである。床面はほぼ平坦で、中央付近を中心に硬化面が広がっていた。住居の北側と東側で掘り方が確認でき、北側では床面より7cmほど掘り込み、黒色土で埋め戻されていた。柱穴、出入り口部の小穴、炉などは認められなかった。埋積土は暗茶褐色土を主体としている。東側では暗茶褐色土と淡褐色土が交互に堆積し、人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

4号住居跡(第14図、第5・17表、図版3・8・13)

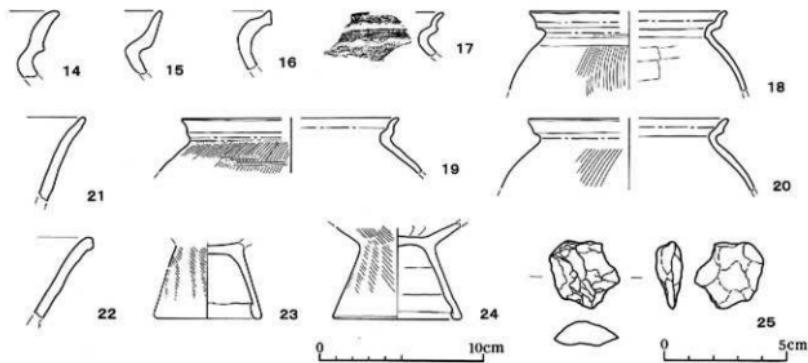
本跡は中央区の南東隅、H-1グリットに位置する。大部分が調査区外にあるため、平面形・規模共に不明である。平面形は南東隅の形状から推して隅丸方形と考えられ、大きさは南北3.8m、東西1.6mを確認した。住居東壁はやや外傾して立ち上がり、深さは34cmである。床面には硬化面は認められなかったものほぼ平坦である。南西隅で小穴を確認し、貯蔵穴と推定する。径58×64cmの橢円形で、深さ57cmである。埋積土は暗茶褐色土・茶褐色土で、自然堆積である。遺物は貯蔵穴内部の中位から土師器の甕(7)の体部片が出土し、同一個体の口辺部片(6)が調査区際の確認面付近より出土した。その他の遺物はほとんどが1層中からの出土である。

5号住居跡(第15図、第6表、図版3・9)

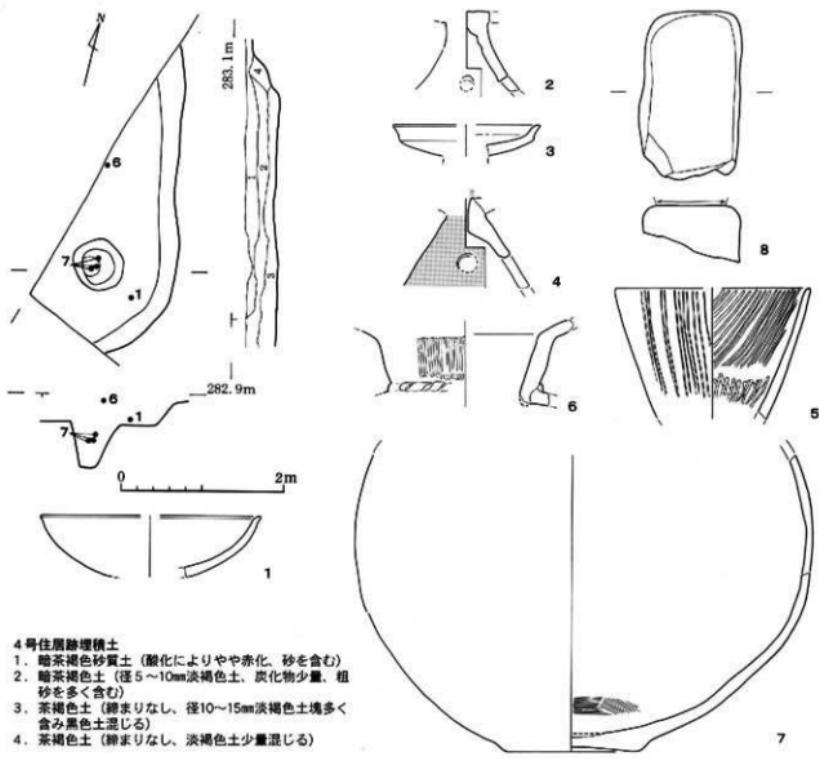
本跡は南区の中央、I-J-3・4グリットに位置し、住居跡の北東隅を確認し、大部分は調査区外に延びている。住居跡は南北2.3m、東西3mを確認し、平面形は隅丸方形と推察される。確認面からの深さは平均26cmで、壁は垂直に立ち上がる。壁下に壁溝が認められ、幅20~30cm、深さ5~10cmである。床面は調査区壁際で確認し、ほぼ平坦である。壁際には溝状の掘り込みが認められ、壁溝上場より幅85cm、床面より深さ14cmである。北東隅では楕円形の掘り込みを確認し、大きさは径80×85cm、深さ17cmである。埋積土は灰褐色土・暗茶褐色土・茶褐色土である。特に12、13、14層は淡褐色土塊を多く含み埋め戻し状態を示していた。遺物は北東隅の掘り込み部分の埋積土中位より、土師器の台付甕(6)が破片の状態で雜まつて出土した。



第12図 3B号住居跡・出土遺物 (1)

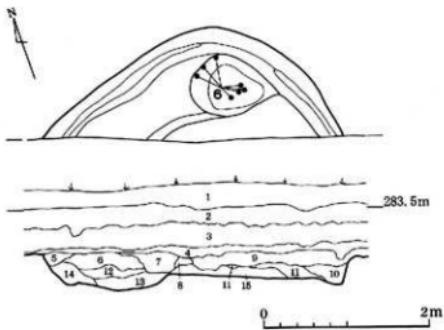


第13図 3B号住居跡出土遺物 (2)



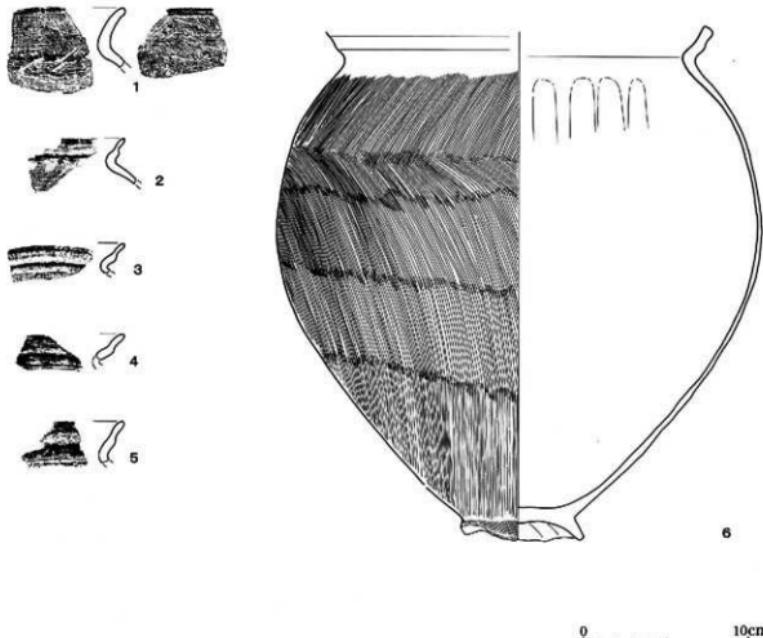
第14図 4号住居跡・出土遺物

- 4号住居跡埋積土
1. 暗茶褐色砂質土（酸化によりやや赤化、砂を含む）
2. 暗茶褐色土（径5~10mm淡褐色土、炭化物少量、粗砂を多く含む）
3. 茶褐色土（練まりなし、径10~15mm淡褐色土塊多く含み黒色土混じる）
4. 茶褐色土（練まりなし、淡褐色土少量混じる）



5号住居跡埋積土

1. 暗灰褐色土（現耕作土）
2. 暗灰褐色土（締まる、酸化により赤化する、径3~6mmの砂を含む）
3. 暗灰褐色土（締まる、1層よりやや明るい、厚さ1~2cmの砂（径0.2~2mm）の層が3枚堆積する）
4. 暗灰褐色土（3層に比べやや酸化による赤化が認められる）
5. 暗灰褐色土（やや粘性のある黒色土塊を多く含む、若干酸化による赤化が認められる）
6. 茶褐色土（締まりが強い、径2~5mm淡褐色土塊を少量、炭化物を若干含む）
7. 暗灰褐色土（4層より暗く、径0.5~1mmの砂を若干含む）
8. 灰褐色土（締まりがない、径0.5~1mm淡褐色土を若干含む）
9. 灰褐色土（締まりがない、径2~5mm淡褐色土塊、炭化物少、0.5~1mmの砂が混じる）
10. 灰褐色土（締まりがない、9層よりやや明るい、径5mm淡褐色土塊多く含む）
11. 茶褐色土（径5~10mm淡褐色土塊、黒色土を多く含む）
12. 暗茶褐色土（径2~3mm淡茶褐色土塊、炭化物少量含む）
13. 暗茶褐色土（径5~10mm淡褐色土塊、炭化物含む）
14. 暗茶褐色土（径5~10mm淡褐色土塊、径2~4mm黑色土塊多量に含む）
15. 茶褐色土（黒色土多く、径10mm淡褐色土少量含む）



第15図 5号住居跡・出土遺物

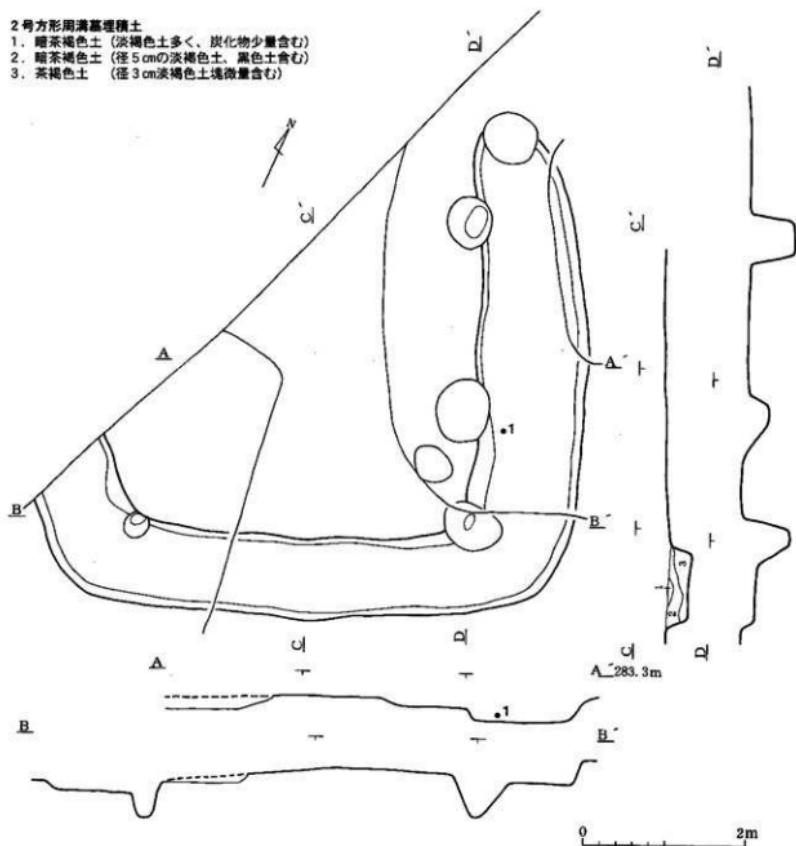
2. 方形周溝墓

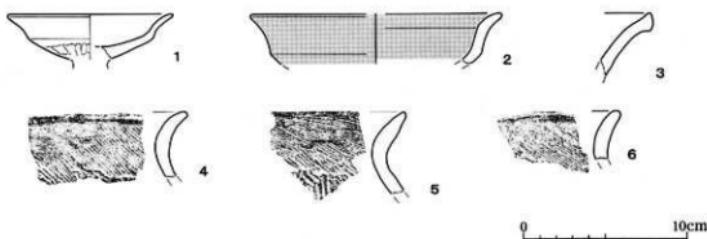
2号方形周溝墓 (第16・17図、第7表、図版3・9)

本跡は中央区の中央南寄り、F・G-1～3グリットに位置し、西側の約1/2が調査区外に延びている。北東が1号住居跡、南西は2号住居跡に切られ、中央より南側は旧耕作により削平されていた。平面形は隅丸方形で、南北推定6.3m、東西6.7mである。主軸方位はN-23°-W。外周には幅1～1.4m、深さ17～31cmの溝が廻り、北東隅は切れている。ただし、北・西側は調査区外で確認できなかった。北東側は1号住居跡に、南西隅は2号住居跡に切られ、壁の立ち上がりは不明である。この溝の三方の隅で小穴を3口確認し、大きさは径30～55cm、深さ48～59cmである。位置から住居の柱穴とも考えられる。上面が削平されていたことから、遺物はそのほとんどが元位置を留めてはいなかったが、器台の受け部(1)が東側の溝内より出土した。

2号方形周溝墓埋積土

- 暗茶褐色土 (淡褐色土多く、炭化物少量含む)
- 暗茶褐色土 (径5cmの淡褐色土、黒色土含む)
- 茶褐色土 (径3cm淡褐色土塊微量含む)



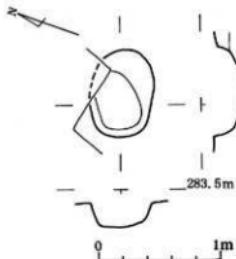


第17図 2号方形周溝墓出土遺物

3. 土坑

1号土坑(第18図)

本跡は北区の北西隅、A-4グリットに位置し、西側に小穴が隣接する。平面形は楕円形、規模は上面73×52cm、底面47×35cm、深さ21cmである。壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋積土は暗茶褐色土で淡褐色土粒、炭化物を少量含んでいる。西側に隣接する小穴と共に遺構は調査区外に延びている為、その性格は不明である。また、試掘調査において2号住居跡出土の塊(7-2)と同種の土師器塊が出土している。



第18図 1号土坑

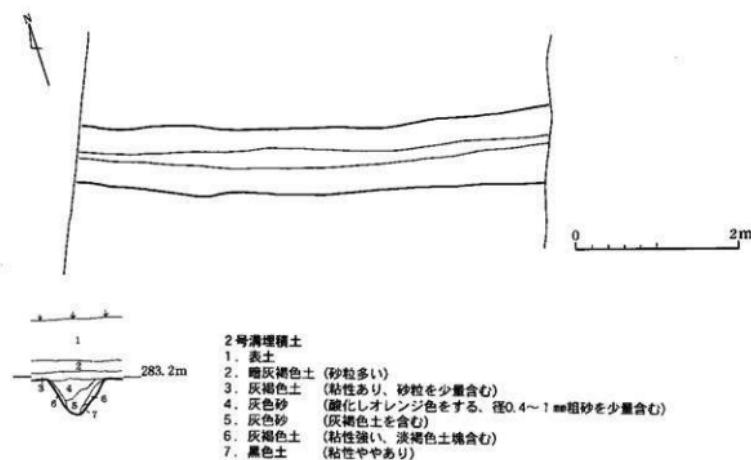
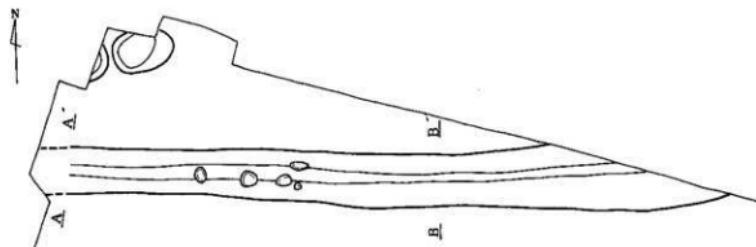
4. 溝

1号溝(第19図、図版3)

本跡は北区の北端A-3～5、B-3～5グリットに位置し、両端は東西の調査区外に延びている。北側約1mに1号土坑が隣接する。長さは8mを確認し、上幅55～75cm、下幅10～20cm、深さ40～60cmで、断面はV字状をしている。本跡は淡褐色土(地山)を掘り込み、底面は西から東に向かって傾斜している。ただし、A4グリットの長さ1.5mの間は砂礫層が露出していた。埋積土は径5～10mmの淡褐色土、黒色土の塊を含んだ綿まりの無い暗褐色土を主体とする自然堆積である。なお、水流の痕跡を示すような堆積物は認められなかった。

2号溝(第19図、図版3)

本跡は中央区の中央、D～E-2～4グリットに位置し、両端は東西の調査区外に延びている。長さは5.7mを確認し、上幅75～85cm、下幅8～20cm、深さ43～52cmである。断面はV字状をしている。底面は西から東に向かって緩く傾斜している。埋積土は砂で酸化により赤化していた。遺物は縄文土器片、弥生土器片、土師器片が出土しているが、埋積土の状況からいずれの遺物も本遺構に伴わないと判断される。



第19図 1・2号溝

第3章 その他の出土遺物

本調査区では、古墳時代の集落が廃絶した後、耕作による切土整地が行われた。その覆土中には縄文時代から中世に至る種々多様な遺物が包含されている。第20図は第21~24図に図示した遺物のグリッド毎の出土状況を表したものである。南に向かって緩く傾斜する地形を切土整地しているため、遺物は調査区の南半部に集中している。以下に概要を記し、個々については表記した。

縄文 縄文時代の遺物は前期から後期初頭にかけてのものが出土している。第21図の1~6は諸磧式期、7~12は猪沢式期、13~27は勝坂式期、28~44は曾利式期、45は称名寺式期の土器である。第22図の1~4は石鏸、5は石鎌の未製品とも思われたが重さ・形状から小型石匙とした。6は調整痕の認められるフレーク、7~13は打製石斧、14は磨石、15は石皿である。8の打製石斧は刃部が黒く変色し、顯著な使用痕を残している。11~13の打製石斧は両端を欠損している。

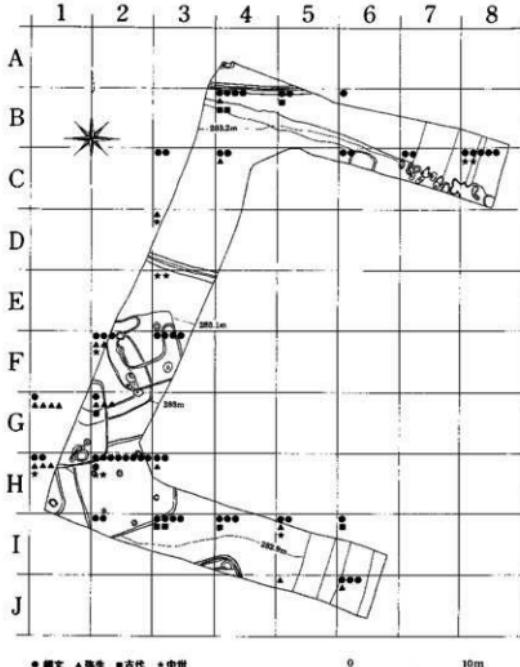
弥生 1~3の口辺部と8の上端に波状文を施している。3・8の頭部には横走文、7は簾状文が施されている。4~6の口縁部はキザミが施される。9~13は体部に波状文が施される。11は割れ口の左右に擦られた痕跡があり、砥石として再利用されたものと推定される。14~18は赤彩されている。

古墳 2は頸部外面に陸帯を貼り付け、クシ状工具による交互の刻みを意匠している。3・4は外面にクシ状工具により横位の「ハ」の字状文が施されている。

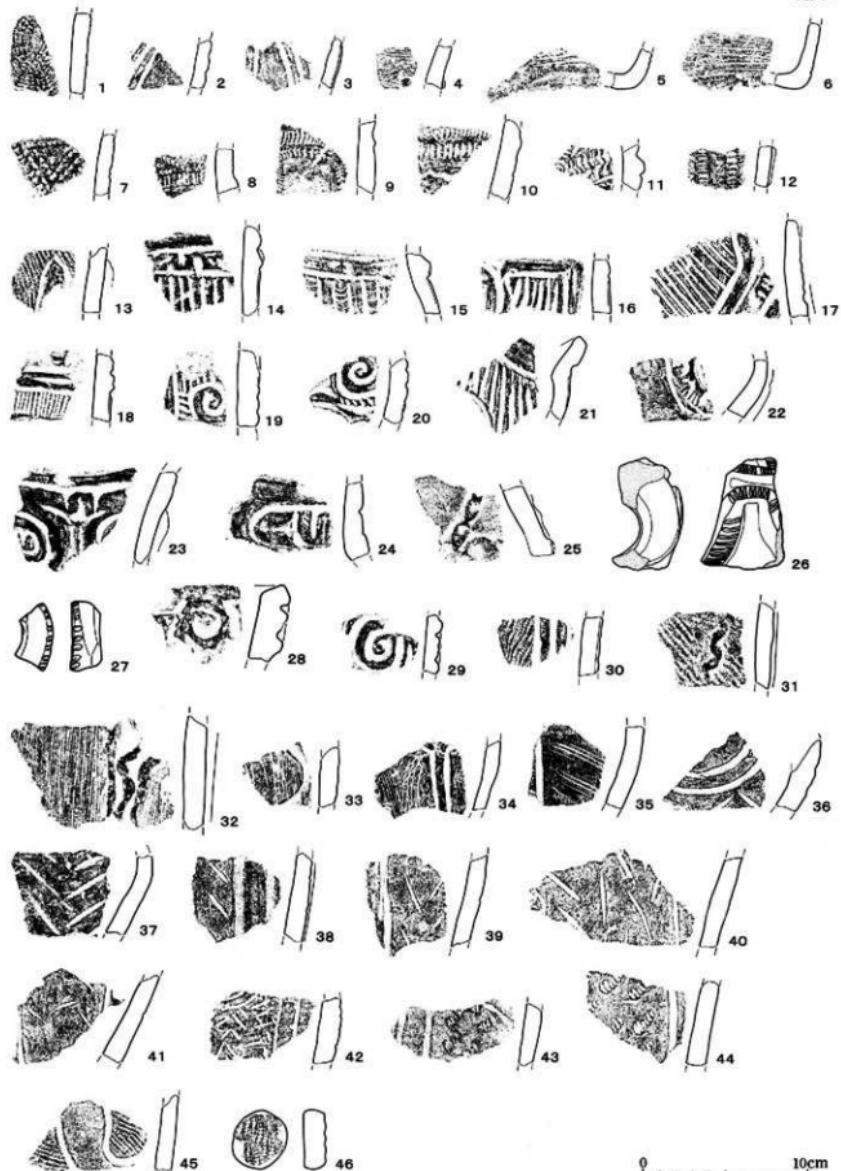
古代 坏類(2~4)は底部へラ起して、3の底部は疊状の圧痕が認められる。5はいわゆる甲斐型土器で、内面と高台内面にミガキが施される。9は甕で口辺部外面に稜を持つようなタイプは8世紀代よりあらわれる。

中世 土師器皿(1)はロクロ成形で、体部が内湾ぎみに立ち上がり口辺部がやや外反し、いくぶん厚手の作りをする。2は瀬戸産、3~5・11・12は美濃産、9は常滑産、8・10は在地産。6・7は船載の磁器である。2・3・4・12は灰釉、5・11は鉄釉。6は白磁のIV類、7は高麗青磁。船載の磁器は11世紀中頃から12世紀、そのほかは15世紀から16世紀初頭のものである。

特殊遺物 1は下端部にナデが施され、上端に剥離痕が認められる。台部の破片かと思われるが、器形は不明である。2は重り部分を欠損した分銅形土製品と考えられる。3は土師器甕の頸部を円形に成形して作られた円盤である。4は剣形石製機造品で、穿孔に2度も失敗するなど製作に不慣れな点が認められる。5は緑色凝灰岩、6は鉄石英で、ともに装身具の原石である。5は弥生時代の玉造の技法による剥離痕が認められる。

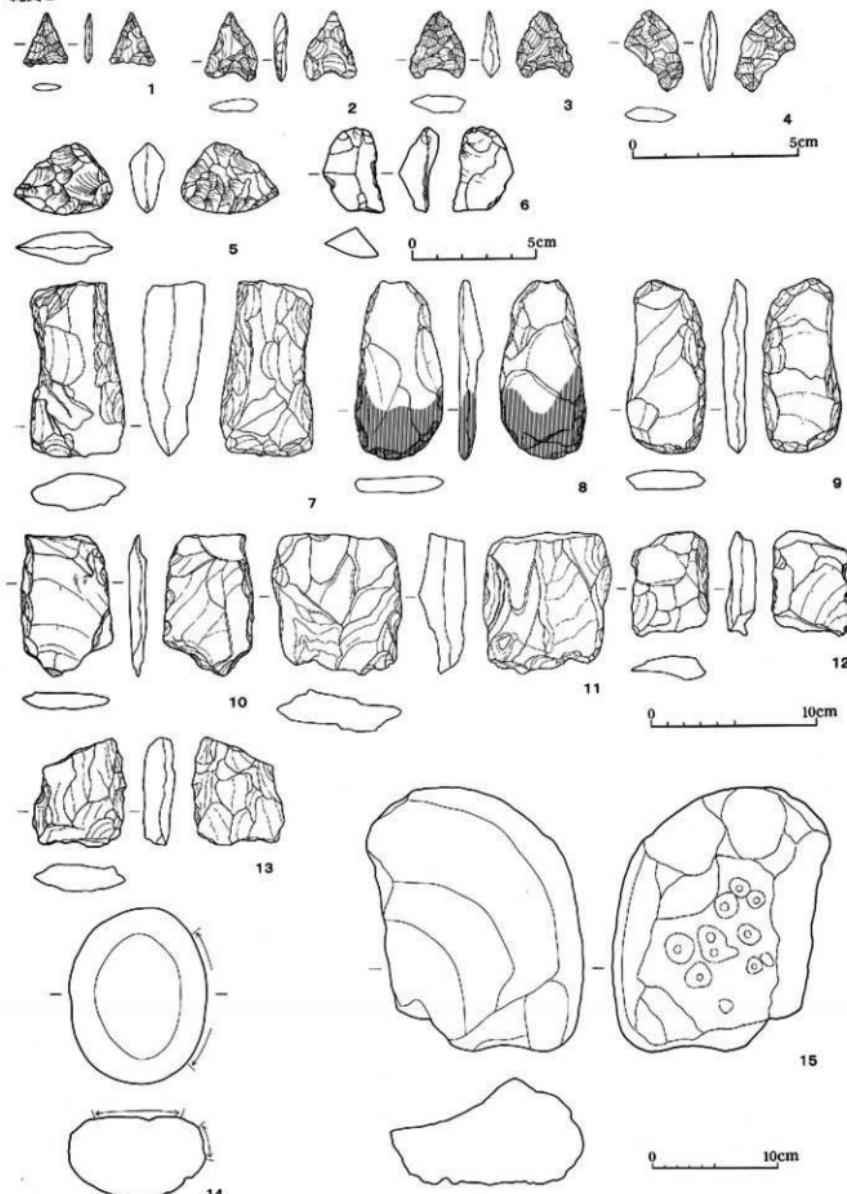


第20図 調査区内出土遺物分布図

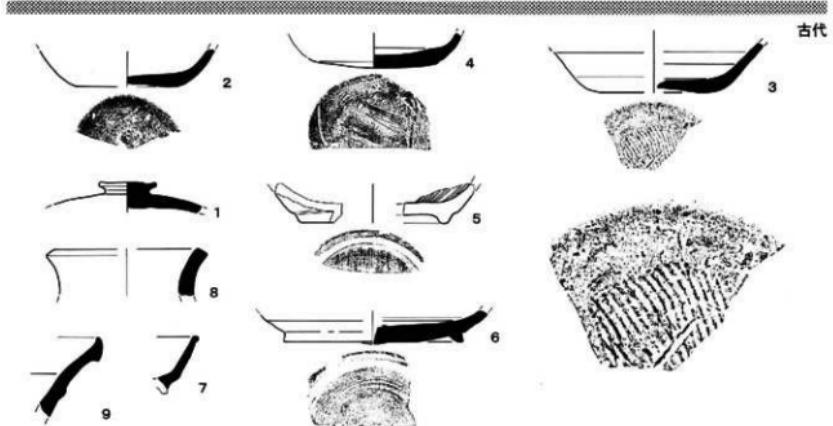
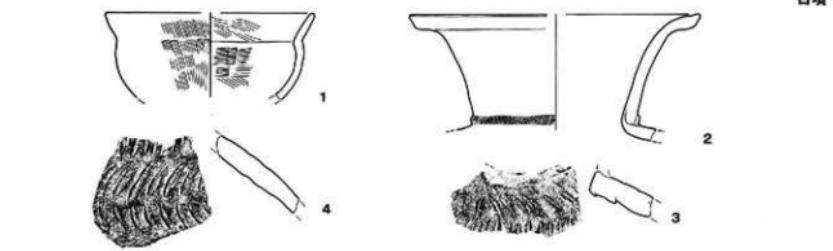
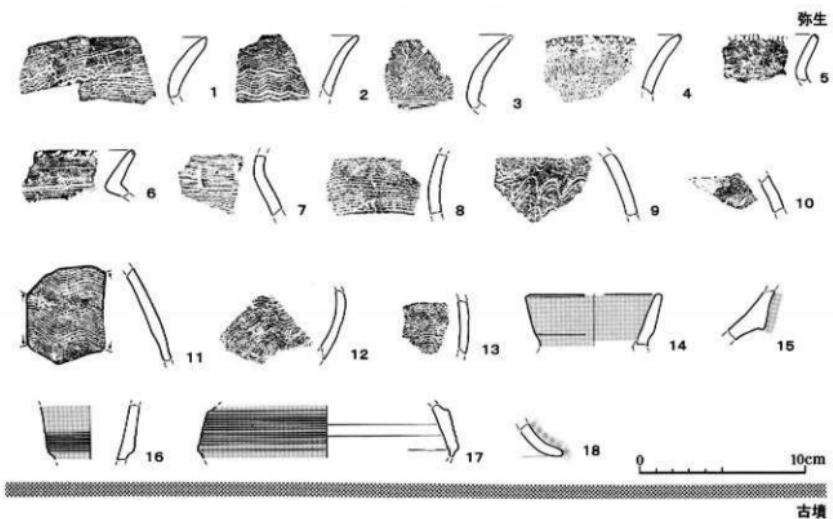


第 21 図 調査区内出土遺物（掲文 1）

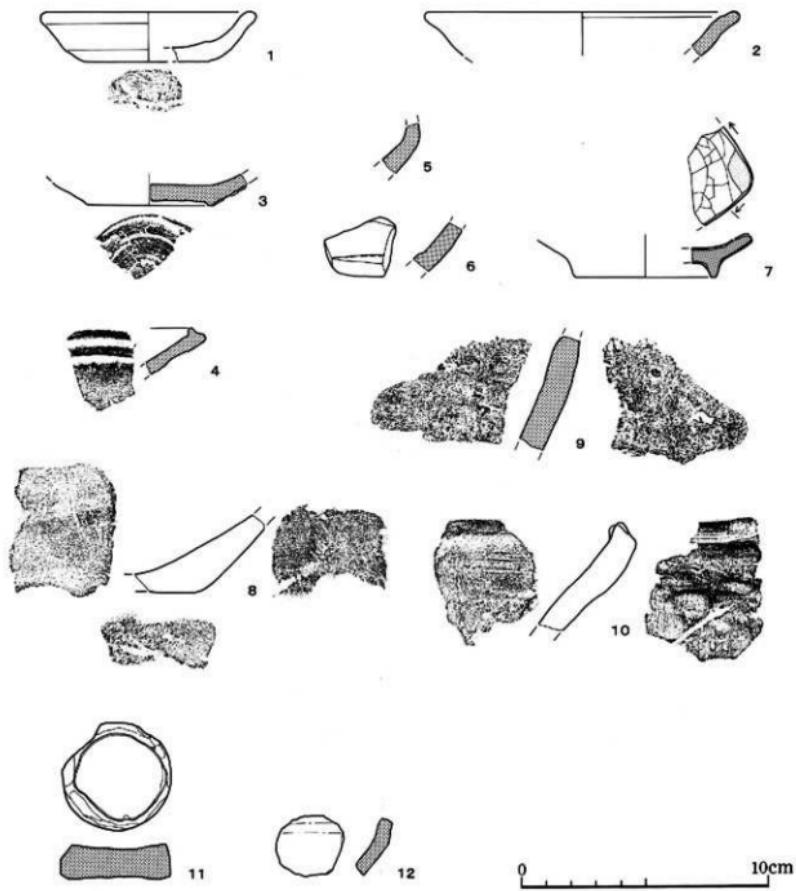
編文 2



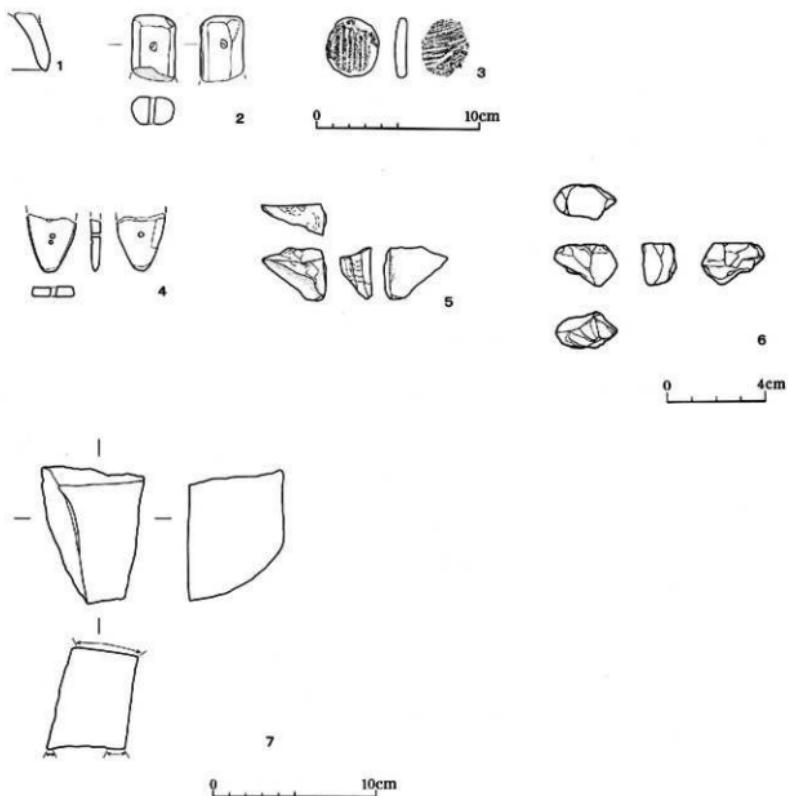
第22図 調査区内出土遺物（編文2）



第23図 調査区内出土遺物（弥生・古墳・古代）



第24図 調査区内出土遺物（中世）



第25図 特殊遺物（土・石・ガラス製品）

第4章 まとめ

今次調査区の主体は古墳時代前期の集落跡である。その他、縄文時代前期から中世にわたる遺構・遺物を確認した。そこで、若干であるが各時代の概要を以下に略記する。

縄文時代

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。今回の調査で得られた資料は旧耕作による二次堆積層からの出土で調査区内に遺構を想定できるものではなかった。出土した遺物は、前期諸磁式期をはじめ、中期猪沢式期、勝坂式期、曾利式期、後期称名寺式期に及んでいる。この中で、曾利式期の土器の出土量が最も多く、また、石鏃、打製石斧、磨石、石皿などの石器類の出土も比較的豊富である。よって、今次調査では遺構を確認することはできなかったが、末法遺跡内に縄文時代の人々の定住を示す遺構が存在することが予測される。

弥生時代

今次調査では縄文時代同様、遺物は出土したが遺構を認ることはできなかった。出土した遺物の大半は後期のもので、赤彩された土器の中には北陸系のもの（第23図 弥生16、17）も含まれる。これらの資料から末法遺跡内にも遺構の存在が推定でき、また、今次調査で確認された古墳時代前期へ移行する時期のものとして重要である。

古墳時代

確認した遺構は住居跡6軒、方形周溝墓1基である。また、埋積土の状況から判断される1号溝、試掘調査で古墳時代の土器が出土した1号土坑も同時代のものと推定される。当地域において古墳時代前期の時期を決める上で重要なポイントとなる遺物にS字状口縁台付甕（以後、S字甕とする。）がある。当地域のS字甕については小林健二氏の詳細な分類があり、これを参考にする。以後、小林分類・口類と銘記する。

住居跡 6軒を確認した。そのうちS字甕の出土した住居跡は1・3A・3B・5号住居跡である。1号住居跡出土のS字甕は口辺部の外反が緩く、内面上端に沈線を持つものが認められる。また、体部上半のヨコハケが認められず、ハケメのみである。（小林分類・Ⅲ類）そのなかでも10は特に口辺部上半の間隔が広く山陰系の口辺を呈している。（小林分類・Ⅲe類）3A号住居跡出土のS字甕は口辺部が外傾し内面上端に沈線を持ち、体部上半部に最大径を持つ大ぶりのものと、口辺部がやや立ち上がり、体部中位に最大径をもつ小ぶりのものとの混在している。3号B住居跡出土のS字甕（19）は口辺部がやや外傾し、体部にヨコハケが認められる。5号住居跡出土のS字甕（6）は口辺部上半と台部を欠損するが、口辺部中段が大きく発達した山陰系の大形品と推定される。（小林分類・Ⅲe類）その他、S字甕の出土していない住居については、2号住居跡の塊（2）は内湾傾向にある。高坏（5）の脚部が短脚化傾向にあり、高坏（6・9・10）は坏部・脚部に段を有する。また、文様を意図したミガキが施された遺物（5・6・9・10・12・13）が認められる。4号住居跡はS字甕が出土していないものの高坏（1）の形状が3A号住居跡のものと類似するため、平行関係にあるものと推定される。

次に住居間の切り合い関係を整理すると、2号住居跡は3A号住居跡・2号方形周溝墓を切っている。3A号住居跡は3B号住居跡が建て替られている。また、5号住居跡はほとんどが調査区外にあるが外周に掘り込みを持つ形態が類似し、方向も一致する。

方形周溝墓 1基を確認した。2号方形周溝墓は全体の半分ほどが調査区外に有り、上面が削平されていたため確認できたのは周溝のみである。周溝は北東隅が途切れている。また、周溝内側の隅の三方（もう一方は地区外）に小穴が確認された。調査当初、方形周溝墓を想定した遺構はこれを含め3基であった。しかし、1号方形周溝墓（1号住居跡）は溝が廻りながらその中に柱穴が確認され、中央から出土した川原石が火・熱を受けていることからこの川原石を炉石と判断し、住居跡に変更した。また、5号住居跡も当初は方形周溝墓とも思われた。しかし、北辺に周溝状の掘り込みは持つものの、東辺には壁溝と考えられるものがあり全体に掘り込まれマウンドが判然としないため、1号住居跡と同形態の住居と判断した。以上のことから2号方形周溝墓について形態から方形周溝墓と判断したが、住居跡の可能性も捨てきれない。

以上、古墳時代の遺構について概略を記してきたが最後に各遺構の時期について『山梨県史資料編2』を参考に説明を加える。小林分類・Ⅲe類のS字型を持つ5号住居跡はⅡ期(4世紀中葉)、これと平行関係にあるのが1号住居跡である。3A号住居跡はS字型の形状や伴うほかの遺物との関係からⅢ期(4世紀後半~5世紀前半)、3B号住居跡は弥生土器やS字型など多様な遺物が出土しているが、3A号住居跡が建て替えであることから、さほど時間差のないものと判断される。2号住居跡はS字型を含まず、高壙の形状と遺構の切り合いから判断して本集落で最も新しいVI期(5世紀中葉)と判断される。また、4号住居跡は確認した遺構の規模が小さいことと遺物の量が少ないと判断に苦しむところであるが、3A号住居跡との関係からⅢ期(4世紀後半~5世紀前半)としたい。2号方形周溝墓は遺構の切り合い関係からⅢ期と考えられる。また、遺構は調査区の南西隅に集中して確認されたことから、集落の中心は本調査区の南西方と考えられる。

土器以外の古墳時代の遺物として管玉(1件)、ガラス小玉(2件)などの装身具やその原石が住居跡や調査区内から出土した。第Ⅱ次調査でも同様の石材(珪化凝灰岩)が出土していることから、集落内における玉の生産は想像に難くない。

古代

今次調査では遺構を確認することはできなかった。図示した遺物はほとんど8世紀代のものであるが、敷島町内ではこれまで該期の遺構の調査例が少なく判然としない。本遺跡の北方に境を接する松ノ尾遺跡は平安時代前期後半から後期を中心とした集落とされるが、これまで調査された部分が遺跡の推定範囲の中央部より北側に限られている。過去の調査でこの時期の住居が確認されており、遺跡の中央から南側に奈良時代の遺構の存在が推察される。したがって、今次調査で出土した8世紀代の遺物は地形的に見て本遺跡内に帰属すべき遺構を想定するよりは松ノ尾遺跡からの流れ込みと考え方が妥当と思われる。

中世以降

今次調査で中世と断定できる遺構は確認されなかった。しかし、縄文から中世までの遺物を包含する耕作痕やそれに切られる2号溝は、当初近世以降のものと思われたが、その上層に数回にわたって河川の氾濫を受けた痕跡が認められたことや近世以降の遺物を含まないことから近世より下るものと判断される。耕作痕の覆土より出土した中世遺物は土師質土器、瀬戸・美濃の陶器片、船載の磁器(白磁・高麗青磁)などである。遺物の時期は国内産の土師質土器や陶器片が15世紀から16世紀初頭、船載の磁器は11世紀中頃から12世紀である。建物跡のような明確な遺構を確認できず、中世遺物の所属をはっきりと掴みきれないが耕作痕や2号溝が近世以前のものであれば出土遺物から15~16世紀と想定される。国内産と船載の磁器の間にはやや時間のずれはあるものの船載の磁器は数が少なく伝世品の破片(特に高麗青磁は破損した後、割れ口を擦って再利用した痕跡が認められる)と判断され、支障はないものと考えられる。

また、今次調査で出土した船載の磁器のうち1点は器形・色調などから高麗青磁と判断したが、山梨県下では明野村深山田遺跡より13世紀後半から14世紀中葉の梅瓶の破片4点が出土しているに過ぎず、検討を要するやもしれない。

以上の如く今次調査では、古墳時代前期の集落を確認することができた。また、縄文から中世にかけての出土遺物によって、遺構は確認されなかったものの近隣にこれらの時代に属する遺構の存在を推定できた。

敷島町においてはこれまで埋蔵文化財の発掘調査は町の担当職員によって行われてきた。しかし、近年調査件数の増大に伴って、はからずも調査を担当することになった。

本書を上梓するにあたり調査から報告書作成まで御指導・御助力を賜った多くの方々に感謝申し上げるしだいである。

参考文献

- 山梨県 1999『山梨県史資料編2 原始・古代2』
中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年」の現状と課題一時間軸の設定ー』『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小林健二 1993「外米系から在来系へ—甲斐のS字型の変遷ー」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
横田賢次郎・森田勉 1978「人字肩付土器の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にしてー」『研究論集』4 九州歴史資料館

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	CIX	土師器	壺	(15.4) 3.2 1/3	体部上半		内外面に文様を施したミガキが施される。	赤褐色	密	
2	P6	土師器	器台	10.0 2.9	受け脚丸形	受け脚外面に脚を持ち、口辺部は外傾する。	口辺部ナデ、受け脚外面腰のケズリ、内面脚付根のミガキ。	褐色	良	
3	P7	土師器	器台		受け脚部1/2		受け脚内外面ミガキ、台脚外側ケズリ。	暗褐色	細密	受け脚に小孔が認められる。内部に焦が付着し、火熱を受ける。
4	DIX	土師器	壺	(19.6) 3.6	口辺部1/6	口辺部外面中程に段を有し、口辺部は直立する。	内外面に文様を施したミガキが施される。外部の段にシラ状丁真による転脚が構成する。	茶褐色	緻密、金雲母	
5	P8	土師器	台付壺	(13.0) 7.2 1/3	体部上半	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。口辺部は工具跡を有す。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケヌ、内面脚付根のミガキ。	外:茶褐色 内:灰褐色	金雲母	外側に焼け付着。
6	BIX	土師器	台付壺		口辺部片	口辺部外面中程に段を有し、口辺部前面1/6位に横筋を持つ。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケヌ、内面脚付根のミガキ。	褐色	粗く、金属斑を含む。	
7	P2	土師器	台付壺	(13.5) 9.3 1/3	体部上半	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。	口辺部ナデ、体部外面ハケヌ、内面脚付根のミガキ。	茶褐色	細密・金雲母 多く含む。	
8	DIX	土師器	台付壺	(13.0) 6.2	口辺部片	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。口辺部前面に横筋を持つ。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケヌ、内面脚付根のミガキ。	茶褐色	細密・金雲母 多く含む。	
9	P4	土師器	台付壺	(11.6) 8.3 1/3	体部上半	口辺部の下部は肥厚し、やや立ち上がり。	口辺部横模様、体部外面ハケヌ、内面脚付根のミガキ。	茶褐色	粗く、金属斑を含む。	
10	B-D 区	土師器	台付壺	(26.0) 6.5	口辺部片	口辺部は外傾し、外側に2条の段を持つ。	口辺部外面ナデ、内面横模様のミガキ。	外:黒褐色 内:褐色	密・金雲母	外面に焼け付着。
11	P1	土師器	壺	(13.2) 10.9 1/3	体部上半	口辺部は外傾する。	口辺部外面ナデ、体部外面ハケヌ、下位横のケズリ、内面ハラナデ。	茶褐色	粗め多く、粗い、金雲母、石英	火熱を受ける。

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P20	土師器	壺	(12.5) 5.5 1/3	口辺部(ほぼ垂直)、底部よりや丸底である。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ。	褐色	粗い		
2	P23	土師器	壺		体部片	口辺部はやや内傾、底部よりや丸底。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ、底部よりや丸底。	褐色、底端墨色	細密	3号住と同一個体。
3	CIX	土師器	壺		体部片	口辺部内面に段を持ち、口辺部は折り外傾する。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。	茶褐色	密	
4	貯藏六	土師器	壺	9.0 3.1	体部片	口辺部は外傾する。		茶褐色	細密	火熱を受ける。
5	P14, 28	土師器	高壺	16.8 9.5 12.0	完形	底部外面に幅から段を持ち、口辺部に向かって外傾する。脚部は「八」字状で開く。	脚部前面ケズリ、底面ナデ。外側全周及び内側内面が「八」字状に文様を施したミガキが施される。	茶褐色	密	脚部は火・熱を受け黒く焼けている。
6	P11, 21	土師器	高壺	20.8 8.1	脚部1/2	体部外側に段がある箇所が焼けられ、口辺部は僅かに内傾する。	口辺部外面ナデ、体部外面及び、内面全周に文様を施したミガキが施される。	茶褐色	細密	火・熱を受け、内面に焼け付着する。
7	EIX	土師器	高壺	(14.2) 4.5	脚部1/6	体部外側に段を持ち、口辺部は外傾する。	口辺部外面横のミガキ、内面ナデ。	赤褐色	細密	火・熱を受ける。
8	P1	土師器	高壺		脚部2/3		脚部外面ミガキ、内面上位ナデ、下位横のケズリ。	褐色	密	3口の小孔。火・熱を受ける。
9	P1	土師器	高壺	5.6 (12.0)	脚部1/3	脚部外面に段を有し、「八」字形に開く。	内面上位横のケズリ、下位ナデ。外側に文様を施したミガキが施される。	茶褐色	密	火・熱を受ける。

10	B区	土鍋器	高坏		1.8 (13.4)	脚部片	脚部外面に縫を有し、開く。	外面に文様を施したミガキが施される。内面下位ナゲ。	褐色	やや粗い、 密		
11	A区	土鍋器	小高坏		8.0 3.9	口辺部片	口辺部は外傾する。	外面ミガキ。	赤褐色	密、赤色粒	火・熱を受ける。	
12	B区	土鍋器	小高坏		8.1 3.1	口辺部片	口辺部は外傾する。	内外面に文様を施したミガキが施される。	赤褐色	密	火・熱を受ける。	
13	P24	土鍋器	小高坏		体部上1/3	体部は球形である。	体部外面に縫の文様を施したミガキが施される。	赤褐色	密			
14	P 12,18 19,26	土鍋器	塊		14.0 14.8	1/3	口辺部は「く」の字形に外傾し、体部は直角である。	口辺部ナゲ、体部外面へラケズ外、内面横のハラナデ、脚部下面ハラナデ。	茶褐色、 外:茶褐色、 内:灰褐色	粗、 粗		
15	P8	土鍋器	塊		14.0 13.0	1/2	口辺部は「く」の字形に外傾し、体部は球形で、脚部は平底である。	口辺部ナゲ、体部外面ハケス、内面ヨコハケ、脚部外側カズレ。	褐色、一部黒色 細い、3mmほど の縫を含む。	火・熱を受ける、変形する。		
16	A区 床下	土鍋器	塊		口辺部片		口辺部外面ハケスのちナゲ、内面下位横のハラナデ、体部外面ハケス、内面ヨコハケ。	褐色	やや粗い、 密			
17	P9, 附壁穴六	土鍋器	塊		体部上半 1/3	脚部は球形をする。	体部外側へラケズ外、内面横のハラナデ。	褐色	粗い、石英			
18	P1, 15	土鍋器	塊		15.0 8.2	体部上半 1/3	体部上半に最大径を有し、口辺部は「く」の字形に外傾する。	口辺部外面ハケスのち横ナゲ、内面ヨコハケ、体部外面ハケス、内面ヨコハケ。	暗褐色	粗め、 外:茶褐色、 内:灰白色	外:茶褐色、 内:灰白色	外:茶褐色、 内:灰白色
19	P21	土鍋器	塊		13.4 4.1	口辺部片	口辺部は「く」の字形に外傾する。	口辺部外面ハケスのちナゲ。	外:暗褐色、 内:灰白色	粗め、 石英	外:茶褐色、 内:灰白色	
20	P24	土鍋器	塊		13.6 8.9	体部1/2	体部は球形をし、底部はやや丸底である。	体部外側中位ハケス、下位及び底面ハラナブリ、内面ハケス。	外:灰白色、 内:暗褐色	やや粗い、 6mm縫合む。		
21	P3	ミニチュ ア土器			5.5 4.6 4.2	2/3		口辺部ナゲ、内面脚ナゲ。	褐色、一部黒色	細め、白色粒		
22	P16	ミニチュ ア土器			5.1 4.5 3.7	完形		内面脚ナゲ。	褐色、一部黒色	やや粗い、 密		

第3表 3A号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P6	土鍋器	塊	(13.8) 5.5	1/2	半球形をし、口辺部は若干内傾する。	外面横のミガキ、内面斜状の文様を施したミガキが施される。	外:黒色、内: 褐色	密、赤色粒、金 雲母	2号作2と同じ。
2	P25	土鍋器	高坏	(13.6) 7.0	2/3	底部は半球形をし、口辺部周辺に縫を持つ。「八」の字形に開く。	口辺部ナゲ、外面横のミガキ、内面斜状のミガキ。	赤褐色	密	脚部に小孔。
3	P27	土鍋器	高坏	13.0 4.3	外側洗形	底部は半球形をし、口辺部内面に縫を持つ。	口辺部ナゲ、内面に文様を施したミガキが施される。	褐色	密	
4	P15	土鍋器	高坏	脚部1/2	脚部は「八」の字形に開く。	脚部外側:位カズレ、下位ミガキ、内面横ハケス。	赤褐色	普通、赤色粒有 干	脚部に3口の小孔。火・ 熱を受ける。	
5	P19	土鍋器	高坏	脚部1/2	脚部は「八」の字形に開く。	外表面ミガキ、内面横のカズレ。	褐色	普通	3口の小孔が認められる。	
6	P21	土鍋器	高坏	脚部1/2	脚部は「八」の字形に開く。	脚部外側上位カズレ、内面横のカズレ。	褐色	普通、金雲母	脚部3口の小孔。	
7	P4	土鍋器	高坏	脚部1/3	脚部は大きく「八」の字形に開く。	底部内面ミガキ、脚部上端カズレ、ミガキ、内面横のカズレ。	褐色	普通、赤色粒有 干	3口の小孔が認められる。	
8	D6K	土鍋器	高坏	脚部上1/2	脚部はやや柱状とする。	外表面ミガキ。	暗褐色	やや粗い、 密	小孔。	
9	P20	土鍋器	器台	受け部-台 高1/2 (14.2)	受け部外面に縫を持ち、台部は人気く「八」の字形に開く。	受け部内面ミガキ、台部上端カズレ。	褐色	密、赤色粒有 干	受け部と台部にそれぞれ3口の小孔が認められる。	

10	P14	上角器	器台	受け部-台 部	受け部外面に段を持ち、台部は 大きく「八」の字状に開く。	受け部外面にガタ。	褐色	赤、赤色少量	受け部に4口、台部に3 口の小穴が開けられる。	
11	P2	土角器	器台	9.5 3.0	受け部外面に段を持ち、口邊部 が外傾し、口邊部内面に棘を持つ。	口邊部ナデ、体部外曲ケズり、内 面放熱状付いたガタ。	褐色 赤、金黄			
12	P10	上角器	器台	10.2 3.4	受け部外面に段を持ち、口邊部 が外反する。	口邊部ナデ、体部外曲ケズ。	赤褐色	赤	火・熱を受ける。	
13	P5	土角器	器台	9.6 5.2 1/2	受け部外面に段を持ち、口邊部 は外傾する。	口邊部ナデ、体部外曲ケズリ、内 面放熱状付いたガタ。台部外面にガ タ、内面張りラテクス。	褐色	赤	台部に複数口の小孔。	
14	P11	土角器	小洋彌	6.4 3.5	口邊部外傾、体部は楕円形し 底盤は平坦。	口邊部内外、体部外曲ケズリガ タ、内面張りラテクス。	褐色	赤		
15	P8	上角器	量	6.4 1/3	体部上半 1/3	口邊部は外傾し、体部は楕円形で ある。	口邊部内外、口邊部上面にガタ。	褐色	火・熱を受ける。	
16	P25	上角器	量	(14.0)	破片	口邊部中央に棘が開けられる。	細部前面ガタ。	褐色 赤、金黄母	火・熱を受ける。	
17	C1区	土角器	裏	5.3	口邊部片	口邊部大きめ外傾し、口邊部に キサギを持つ。	口邊部外面ナデ、下位ハケメ、内 面コハゲ。	褐色	やや粗い、白 色和若干	
18	P18	土角器	台付彌	(15.7) 4.8	口邊部片	口邊部外面中間に段を持ち、口 邊部はやや外傾する。	口邊部工具によるナデ、体部外 曲ケズリのうち(ハ)ケメ、内面開 ナデ、背面内面コハゲ。	褐色	普通、金黄母	
19	B1区	土角器	台付彌	(16.6) 5.1	口邊部片	口邊部外面中間に段を持ち、や や外傾する。	口邊部工具によるナデ、体部外 曲ケズリのうち(ハ)ケメ、内面開 ナデ、背面内面コハゲ。	褐色	普通、金黄母	
20	P29	土角器	心付彌	(13.0) 5.1	口邊部片	口邊部中央に段を持ち、や や外傾する。	口邊部ナデ、体部外面ハケメ、内 面開ナデ。	褐色 赤、金黄母		
21	P13	土角器	台付彌	(13.8) 5.1	口邊部1/4	口邊部外面中間に段を持ち、口 邊部は肥厚する。	口邊部工具によるナデ、体部外 面ハケメ、内面コハゲ。	赤褐色	普通、金黄母	
22	P3	土角器	台付彌	(11.6) 3.8	口邊部片	口邊部外面中間に段を持ち、口 邊部内面に棘を持つ。口邊部上 段が破壊する。	口邊部ナデ、体部外面ハケメ、内 面開ナデ。	褐色	普通、金黄母	外面全体に煤が付着。
23	P17	土角器	台付彌	(7.0) 3.8	口邊部1/4	口邊部外面中間に段を持ち、口 邊部は肥厚する。	口邊部工具によるナデ、体部外 面ハケメ、内面開ナデ。	赤褐色	普通、金黄母	
24	P12	土角器	台付彌	(18.2) 3.2	口邊部片	口邊部外面中間に段を持ち、口 邊部内面に棘を持つ。	口邊部ナデ、体部外面ハケメ、内 面開ナデ。	赤褐色	普通、金黄母	
25	C1区	土角器	台付彌	(18.9) 4.0	口邊部1/8	口邊部外面中間に段を持ち、や や外傾する。口邊部内面に沈殿 が確認される。	口邊部ナデ、体部外面ハケメ、内 面開ナデ。	褐色 赤、金黄	火・熱を受ける。	
26	D1K	土角器	台付彌	(14.0) 3.2	口邊部片	口邊部外面中間に段を持ち、や や外傾する。口邊部内面に沈殿 が確認される。	口邊部ナデ、体部外面ハケメ、内 面開ナデ。	褐色	普通、金黄母	
27	D1K	土角器	台付彌	7.5 (13.2)	台付彌1/2	台付は「八」の字形に開き、端部 内面に折痕が認められる。	体部外面ハケメ。	褐色	普通、金黄母	
28	P28	土角器	台付彌	6.2 7.3	台付彌	台付は「八」の字形に開き、端部 内面に折痕が認められる。	台付上面ハケメ。	赤褐色	普通、金黄母	火・熱を受ける。
29	D1K	剪生	高杯		破片		端部外面にガタ、底部内面指ナ ゲ。	褐色	相、 环部外面赤	
30	C1K	剪生	高杯		破片		端部外面に4条の辺帯が回 る。	茶褐色	普通	外面赤影
31	A1K	剪生	電		破片	体部外面に横の隆筋が付き、こ れに2条の縦の隆筋が並ぶ。	外表面ガタ。	暗褐色	赤	外面赤影
32	B1K	剪生	器台		破片		外表面ガタ。	褐色	相、 外面赤影、小孔	

第4表 3B号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存状況	器形の特徴	形態の特徴	色調	胎土	備考
1	D区	弥生	甕		口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通、金葉母少量	
2	C区	弥生	甕		口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	
3	A区	弥生	甕		口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	
4	D区	弥生	甕		破片		外面上位縁の波線文、下位波状文、内面ヘナダ。	褐色	普通	
5	A区	弥生	甕		破片		外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通	外面に擦が付着。
6	A区	弥生	甕		破片		外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	外面上部に煤が付着。
7	C区	弥生	甕		破片		外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通	
8	C区	弥生	釜		口辺部片	口辺部は外傾し、中程に段を有つ。口部の土は膨大である。		赤色	普通	外面赤茶。
9	C区	弥生	釜		破片		体部外波状文、内面ヘナダ。	褐色	普通	口辺部内外面赤茶。
10	C区	弥生	釜		破片		体部外波状文、内面ヘナダ。	褐色	普通	
11	D区	土師器	甕		口辺部片	口辺部上弓なり外反する。	口辺部上位縁のヘナダ、内面横のヘナダ、口縁部のサザ、縫合部ケズリ。	褐色	普通、金葉母少量	
12	A区	土師器	甕		口辺部片	口辺部は外傾する。	口辺部上位ナダ、下位ハケム。	淡褐色	やや粗い、石英、長石	火・熱を受ける。
13	P1	土師器	甕	(13.6) 4.3	口辺部片	口辺部は外傾する。	口辺部ナダ、体部内面横のケズリ。	赤褐色	粗い、金葉母、 1~2mm程度多い。	火・熱を受ける。
14	A区	土師器	甕		口辺部片	口辺部外側に段を持つ。	ナダ。	褐色	細い	
15	C区	土師器	釜		口辺部片	口辺部外側に段を持つ。	ナダ。	褐色	細い	
16	C区	土師器	釜		口辺部片	口辺部は外反し、口縁部は直立する。	内外面ナダ、内面下位ハケム、内面横のケズリ。	褐色	やや粗い	
17	A区	土師器	台付甕		口辺部片	口辺部外側に段を持つ。	口辺部ナダ、体部外側ハケム、ヨコハケ。	暗褐色	普通、金葉母	
18	A区	土師器	台付甕	(11.9) 4.8	口辺部片	口辺部外側に段を持つ。	口辺部ナダ、体部外側ハケム、内面ヘナダ。	赤褐色	普通、金葉母	
19	A区	土師器	台付甕	(12.9) 3.3	口辺部片/4	口辺部外側に段を持つ。	口辺部ナダ、体部外側ハケム、ヨコハケ。	暗褐色	普通	
20	B区	土師器	台付甕	(12.0) 4.3	口辺部片	口辺部外側に段を持つ。	口辺部ナダ、体部外側ハケム。	赤褐色	やや粗い、金葉母	
21	D区	土師器	台付甕		口辺部片	口辺部は外傾する。口縁部外側に波線が認められる。	内面ナダ、ミガキ。	褐色	良、金葉母	外面に擦が付着。
22	A区	土師器	台付甕		口辺部片	口辺部外側傾し、口縁部外側に波線が認められる。	内面ナダ。	外: 黒色、内: 暗褐色	普通、金葉母少量	
23	P2	土師器	台付甕		台筋形片	台筋は「八」の字形に開き、縁部と内面に折線が認められる。	右端外側一部ハケム、内面に折線が認められる。	赤褐色	やや粗い、金葉母	
				4.7						

			6.2					
26	C区	J.器	台付便	5.8	台脚部	台脚は「八」の字状に開き、端部 は削り底す。	外面ハケメ、内面ハテナゲ。	赤褐色
				8.0				普通、金型付

第5表 4号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P9	土鍋器	高环	10.2	1/4	环脚は半球形をし、口縁部内面 に梗を持つ。	口辺部ナゲ、内外面ハケキ。	褐色	密	火・熱を受ける。
				3.8						
2		土鍋器	高环	9.8	2/5	脚部は大きく「八」の字形に膨らむ。 外縁にハケキ、内面横のケズリ。	外縁にハケキ、内面横のケズリ。	暗褐色	普通	小孔が確認される。火・ 熱を受ける。
				2.9						
3		土鍋器	器台	10.8	受け盤1/4	体部外面に段を持ち、口辺部 は外傾する。		赤褐色	密	表面加熱している。火・ 熱を受ける。
4		土鍋器	器台	9.5						
5		土鍋器	器台	10.6	口辺部1/4	口辺部はやや外傾して立ち上がり る。	外縁にハケキ、内面横に ケズリがある。	外:赤彩、内: 黒褐色	石英、金型付	3孔の小孔。
6		土鍋器	器台	8.1						
7	P6, 7	土鍋器	器台	18.2	山辺脚片	やや外傾して立ち上がり、中程 で大きく外反する。頭部に粘土 紐を附り付け、その上から斜め の横筋が付される。	外縁にハケキのちハケキ、内面横に ケズリがある。	褐色	粗、赤色粒青 土	
8				8.0						

第6表 5号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1		土鍋器	塊		破片	口辺部は「L」の字形に外反する。	口辺部ナゲ、体部外面ハケメ、内 面ハケキ。	褐色	滑砂、金型母	
2		土鍋器	台付便		破片	口辺部外縁に段を持ち、外傾す る。	口辺部ナゲ、体部外面ハケメ。	褐色	滑砂、金型母	
3		土鍋器	台付便		破片	口辺部外縁に段を持ち、外傾す る。	口辺部ナゲ。	褐色	滑砂、金型母	
4		土鍋器	台付便		破片	口辺部外縁に段を持ち、外傾す る。	口辺部ナゲ。	黒褐色	細沙	外縁に擦付有。
5		土鍋器	台付便		破片	口辺部外縁に段を持ち、外傾す る。	口辺部ナゲ。	暗褐色	滑砂、石英	
6	P1 ~ 7	土鍋器	台付便		体部1/2	口辺部下端に二条の段を持ち、外傾す る。底部より上方に最大幅を持つ。	口辺部ナゲ、体部外面ハケメ、内 面横の指ナゲ、底部外面ハケ メ、内面横ナゲ。	褐色	粗砂、金型母	口辺部と、台脚が欠損 したのも、2次使用され る。
				31.5						

第7表 2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P1	土鍋器	器台	2.7	受け盤1/3	体部外縁に段を持ち、口辺部は 外反する。	口辺部ナゲ、体部外面ケズリ、内 面ハケキ。	褐色	密、赤色粒	内面剥離。
2		土鍋器	高环	3.1	口辺部1/5	体部外縁に段を持ち、口辺部は 外反する。	内面ハケキ。	赤色	密	内面剥離。
3		土鍋器	器台		口辺部片	口辺部上端に大きく外反する。		褐色	粗い、1~2mm 砂多い。	火・熱を受ける。
4		土鍋器	塊		口辺部片	口辺部上端に大きく外反する。	口辺部上端ナゲ、下面下位ハケ メ、内面横ハケキ。	褐色	粗い、2~3mm の砂少々含む。	

5	土師器	塊		口辺部片	口辺部は大きく外反する。	口辺部上位ナデ、外面下位ハケメ、内面ノン。	暗褐色	粗い、3~4mm 礫石を含む。	
6	土師器	塊		口辺部片	口辺部は外反する。	上位ナデ、下位ハケメ、内面ノン。	暗褐色	やや粗い、1~2mm程度。	

第8表 調査区内出土遺物観察表（繩文1）

番号	出土地名	種別	器種	寸法 (cm)	部位	剖面・裏面(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	C-3Gr	绳文	筒狀		体	紡錘状绳文		茶褐色	石英、金雲母	
2	3(江)区	绳文	筒狀		体	沈縞文		外:褐色、内: 黑色	砂粒、	
3	2(住)区	绳文	筒狀		体	沈縞文		褐色	細砂	
4	3(住)区	绳文	筒狀		体	平行状縞文・刃状文		茶褐色	無葉母少量	
5	F-2Gr	绳文	筒狀		底部	平行状縞文		褐色	黒雲母多量	
6	B-4Gr	绳文	筒狀		底部	平行状縞文	外:茶褐色、 内:黑色	黑雲母		
7	B-4Gr	绳文	筒狀		体	三角形縞文		茶褐色	砂粒、金雲母	
8	1(住)区	绳文	筒狀		体	三角形縞文、押し引縞文		褐色	砂粒、黒雲母	
9	I-6Gr	绳文	筒狀		体	三角形縞文、押し引縞文		茶褐色	砂粒	
10	I-3Gr	绳文	筒狀		体	押し引縞文		茶褐色	砂粒、黒雲母	
11	C-3Gr	绳文	筒狀		体	押し引縞文、爪痕文		茶褐色	細砂	
12	B-4Gr	绳文	筒狀		体	押し引き文		茶褐色	砂粒、黒雲母	
13	B-5Gr	绳文	筒狀		体	绳文		褐色	砂粒	
14	J-6Gr	绳文	筒狀		体	階層+爻互斜文、沈縞文		茶褐色	細砂、石英、黒 雲母	
15	C-8Gr	绳文	筒狀		体	階層+沈縞文、爪痕文		外:淡黑色、 内:淡褐色	砂粒、石英、雲 母	
16	B-6Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文		茶褐色	砂粒、石英	
17	B-5Gr	绳文	筒狀		体	階層+沈縞文	外:褐色、内: 黑色	砂粒		
18	1(住)	绳文	筒狀		体	階層、沈縞文		茶褐色	細砂、金雲母	
19	3(江)区	绳文	筒狀		体	沈縞文		褐色	粗砂、金雲母	
20	J-6Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文		褐色	粗砂	
21	I-4Gr	绳文	筒狀		口辺	沈縞文		褐色	細砂、雲母	
22	J-6Gr	绳文	筒狀		口辺	階層+沈縞文		茶褐色	細砂、金雲母	
23	C-6Gr	绳文	筒狀		体	押し引き文(沈縞文)		褐色	細砂、石英、雲 母	
24	C-6Gr	绳文	筒狀		体	押し引き文(沈縞文)	外:褐色、内: 灰褐色	細砂、石英		
25	H-3Gr	绳文	筒狀		体	階層+押し文		褐色	粗砂、雲母	
26	I-5Gr	绳文	筒狀		把手	爪痕文		茶褐色	粗砂	
27	I-2Gr	绳文	筒狀		把手	刺突文		褐色	雲母	
28	H-3Gr	绳文	筒狀		口辺	階層		褐色	粗砂、石英、雲 母	
29	C-8Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文	外:褐色、内: 黑色	粗砂、雲母		
30	F-3Gr	绳文	筒狀		体	绳文(押出凹凸)+沈縞文		茶褐色	粗砂、雲母	
31	3(江)区	绳文	筒狀		体	绳文(半縮L)+階層		茶褐色	粗砂	
32	H-3Gr	绳文	筒狀		体	条縞文+階層	外:黑色、内: 褐色	粗砂、金雲母		
33	G-1Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文+条縞文		白色	粗砂、金雲母	
34	I-5Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文+条縞文		茶褐色	粗砂、石英、雲 母	
35	I-3Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文		白色	粗砂、石英	
36	1(住)区	绳文	筒狀		口辺	沈縞文		茶褐色	粗砂、石英	
37	H-1Gr	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文	外:黑色、内: 褐色	粗砂、金雲母		
38	I-4Gr	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文	外:黑色、 内:褐色	粗砂、金雲母		
39	3(江)区	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文		褐色	細砂	
40	2周東	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文		茶褐色	細砂	
41	F-2Gr	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文		茶褐色	粗砂、石英、金 雲母	
42	B-4Gr	绳文	筒狀		体	「ハ」の字状文		外:灰褐色、 内:褐色	粗砂、金雲母	
43	H-2Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文+刃状文		褐色	粗砂、石英、雲 母	
44	3(江)区	绳文	筒狀		体	沈縞文+刃状文		茶褐色	細砂、金雲母	
45	I-3Gr	绳文	筒狀		体	沈縞文+条縞文(半縮L)		茶褐色	粗砂、金雲母	

46	縄文	円盤	3.25	縄文(半周)	褐色	細砂
----	----	----	------	--------	----	----

第9表 調査区内出土遺物観察表(弥生)

番号	出土地名	種別	器種	寸法(cm)	部位	整形・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	I-5Gr	弥生	甕		口辺	波状文		褐色	石英、金雲母	
2	J-5Gr	弥生	甕		口辺	波状文	ナデ	茶褐色	普通、金雲母	
3	G-2Gr	弥生	甕		口辺	波状文、横走文	ミガキ	褐色	やや粗く、金雲母含む。	
4	H-3Gr	弥生	甕		口辺	ハケス、口縁部キズ	横ヘナデ	外:茶褐色、内:褐色	粗砂	
5	G-2Gr	弥生	甕		口辺	口縁部キズ		褐色	普通	
6	G-1Gr	弥生	甕		口辺	口縁部キズ	ヘナデ	褐色	やや粗く、金雲母含む。	
7	F-2Gr	弥生	甕		底部	波状文、波状文		茶褐色	普通	
8	B-4Gr	弥生	甕		颈部	横走文、波状文		淡褐色	やや粗く、金雲母含む。	
9	H-1Gr	弥生	甕		体	波状文	ナデ	外:褐色、内:茶褐色	金雲母含む。	
10	G-1Gr	弥生	甕		体	波状文		外:黑色、内:褐色	普通	
11	4住	弥生	甕		体	波状文	ミガキ	外:褐色、内:褐褐色	普通	研石として再利用される。
12	H住DK	弥生	甕		体	波状文		褐色	粗砂	
13	J-1Gr	弥生	甕		体	波状文		暗褐色	やや粗く、金雲母含む。	
14	G-1Gr	弥生	甕	(7.8)	口辺	ミガキ+赤彩		褐色	普通	
15	G-2Gr	弥生	甕		口辺	赤彩		外:赤、内:褐色	粗砂	
16	H-1Gr	弥生	細面甕		口辺	赤彩		外:赤、内:黒色	普通	北朝系
17	C-4, G-1Gr	弥生	細面甕		体	赤彩		外:赤、内:黒色	普通	北朝系
18	D-3Gr	弥生	高杯		脚	ミガキ+赤彩		外:赤、内:褐色	普通、石英	

第10表 調査区内出土遺物観察表(古墳)

番号	出土地名	種別	器種	寸法(cm)	部位	整形・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	F-3Gr	土師器	甕	(12.6)	口辺・体	縦のハケス	ヨコハケ	褐色	粗砂	
2	E-2Gr	土師器	甕	(17.0)	口辺	ミガキ、ケン工具による削突		茶褐色	やや粗い、金雲母含む。	火・熱受付。
3	I-3Gr	土師器	甕		体	クシ状(具による羽状文)		外:褐色、内:茶褐色	普通、金雲母	
4	H-1Gr	土師器	甕		体	クシ状工具による羽状文	ヨコハケ	外:褐色、内:茶褐色	普通、金雲母	32同 倒体

第11表 調査区内出土遺物観察表(古代)

番号	出土地名	種別	器種	寸法(cm)	部位	整形・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	I-4Gr	須恵器	甕					灰色	やや粗い、金雲母	
2	B-4Gr	須恵器	甕		体・底部	底部へラ起		褐色	白、白色	
3	I-3Gr	須恵器	甕		体・底部			灰色	密、黑色粒	底部に「ノ」へラ記号
4	B-5Gr	須恵器	甕		底部	底部ケズ		褐色	密(暗赤色)	内外側に火薙
5	G-3Gr	土師器	高台甕		底部	底部内面積みにミガキ	底付付にミガキ	褐色	密、赤色粒	高台を斜めに削削付け。
6	H-4Gr	須恵器	甕		底部			灰白色	密	
7	I-6Gr	須恵器	小形高台甕		口辺・体部	口辺部分側面に押付		灰色	密	
8	I-3Gr	須恵器	甕	(8.7)	口辺			外:黒色、内:茶褐色	茶(茶褐色)	
9	C-3Gr	須恵器	甕		口辺			深灰色	密	

第12表 調査区内出土遺物観察表(中世)

番号	出土地名	種別	器種	寸法(cm)	部位	整形・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	E-3Gr	カワラケ	小甕	8.4 / 2.1		ロクハ残部、底部剥離		褐色	細砂、金雲母	

2	表	測定	塊	12.4	口辺	灰輪		灰白色	表	
3	E-3Gr	米浦	小塊		底部			茶褐色	表	
4	C-8Gr	米浦	おろし皿		口辺	灰輪		淡褐色	表	
5	D-3Gr	米浦	天貝殻		全体	鉄輪		黑色	表	
6	I-6Gr	白鶴	皿		全体			黃白色	表	口辺V型
7	H-1Gr	高麗青磁	碗		底部			青綠色	表	体部の割れ口を擦って、墨化している。
8	H-2Gr	土師質 十指	鉢		底部			外: 開闊色、 内: 黑色	微砂	
9	F-2Gr	常滑	碗		全体			水墨色	微砂	
10	II-2Gr	土師質 土器	片口鉢		口辺	縁のケズリ		外: 黑色、内: 褐色	微砂	
11	表	米浦	円盤(天貝殻)	4.5	底部		鉄輪	黑色	微砂	
12	C-8Gr	米浦	円盤(平 塊)	2.6	全体	灰輪		淡褐色	表	

第13表 調査区内出土遺物観察表(土製品)

番号	出土地名	分類	形種	寸法 (cm)	部位	整形・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
25-1		土器						褐色	細砂、含塵母	
25-2	I-8Gr	分割土器 製品						茶褐色	粗砂、含塵母	吊り下げる小孔が認められる。
25-3	I-3Gr	土器	円盤	3.2	ハケメ	エコハケ		淡褐色	細砂	縁の口辺部の磨损

第14表 調査区内出土遺物観察表(装身具)

番号	出土地名	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
5-12	I住	腰斧	2.06	0.6		1.257	滑石片岩	完存	石斧は信州風。
8-23	2件P22	ガラス小玉	0.525			0.375	0.033	半分欠損する。	

第15表 調査区内出土遺物観察表(模造品)

番号	出土地名	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
25-4	I-8Gr	劍首飾品	2.4	2	0.4	2.533	緑色岩	根元を欠損する。	1口の穿孔と2口の未穿孔。石付は波川風。

第16表 調査区内出土遺物観察表(縄文2)

番号	出土地名	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
22-1	3HClx1	石器	1.035	1.345	0.215	0.308	黒曜石	完全	
22-2	I-4Gr	石器	2.42	1.56	0.47	1.313	黒曜石	完全	
22-3	C-8Gr	石器	2.02	1.69	0.525	1.334	黒曜石	完全	
22-4		石器	2.43	1.71	0.46	1.355	黒曜石	片側欠損	
22-5	H-1Gr	小型石器	2.92	2.16	10.26	5.016	黒曜石		
22-6	I-2Gr	ブリーフ	2.36	2.26	1.175	8.209	黒曜石		両端部が磨かれる。
22-7	C-4Gr	打削石斧	10.8	5.7	3.6	274	ホルンフェルス	柄部側欠損	
22-8	I住	打削石斧	11	5.2	1.4	96	ホルンフェルス		
22-9	C-8Gr	打削石斧	10.7	4.8	1.4	105	安山岩		
22-10	3HClx1	打削石斧	8.7	5.5	1	64	粘板岩	刃部側欠損	
22-11	C-7Gr	打削石斧	8.7	7.8	2.8	187	粘板岩	刃部側欠損	
22-12	C-8Gr	打削石斧	6.5	4.6	1.7	56	ホルンフェルス	両端欠損	
22-13	I-3Gr	打削石斧	6.7	5.5	2	85	ホルンフェルス	両端欠損	
22-14	C-8Gr	磨石	10.8	8.4	4.9	495	花崗岩		
22-15	C-7Gr	石器	21.8	16.1	8.6	2900	花崗岩	4分の3を欠損する。	

第17表 調査区内出土遺物観察表(石製品)

番号	出土地名	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
11-33	3HClx2	磨石	5.075	5.26	4.83	127	石英岩山脈		
14-8	4住	研石	14	5.8	3.7	361	石英岩	下半分を欠損する。	
25-7	B-5Gr	研石	8.0	5.8	6.0	420	石英岩山脈	側面側面を欠損する。	

第18表 調査区内出土遺物観察表(原石)

番号	出土地名	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
5-13	16CIR	剥片	3.99	3.145	0.48	5.100	理化鑿尖端	薄く削離した剥片。	
13-25	3HClx1 DCR	原石	2.715	2.73	1.1	7.183	鉄石英	打ち落した痕跡は認められない。	
25-6	J-6Gr	剥片	1.9	2.375	1.26	4.902	珪化隕石岩	自然崩落面倒、1面に斜面がある。	
25-6	H-2Gr	剥片	1.565	2.4	1.44	5.439	鉄石英	片面に自然面を残し、片面に打ち落した跡がある。	

図版 1



遺跡遠景（南東から）



北調査区全景（西から）



中央調査区全景（南から）



南調査区全景（西から）



1号住居跡（南東から）



1号住居跡遺物出土状況（西から）



2号住居跡遺物出土状況全景（南から）



2号住居跡全景（南から）



2号住居跡貯蔵穴（南から）



2号住居跡遺物出土状況（南から）



3A号住居跡遺物出土状況（南東から）



3A号住居跡全景（南東から）



3A号住居跡遺物出土状況（南東から）



3A号住居跡遺物出土状況（西から）



3A号住居跡遺物出土状況（西から）



3B号住居跡全景（南東から）

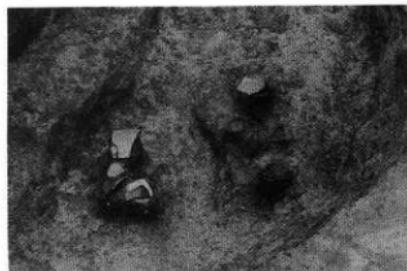
図版 3



4号住居跡（南から）



5号住居跡全景（北から）



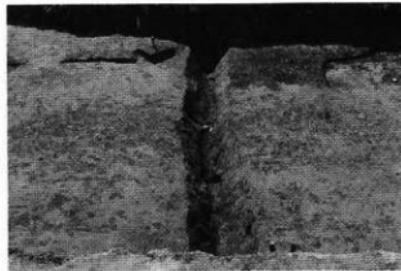
5号住居跡遺物出土状況（東から）



2号方形周溝墓全景（南東から）



1号溝全景（西から）



2号溝全景（東から）



作業風景



調査参加者

1号住居跡出土遺物



5-2



5-4



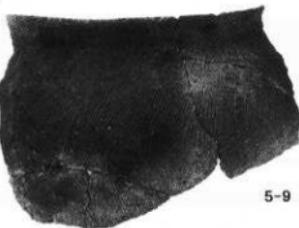
5-7



5-5



5-11



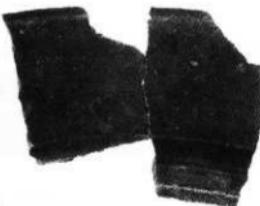
5-9



5-8



5-6



5-10

图版 5

2号住居跡出土遺物 (1)





3 A号住居跡出土遺物 (1)



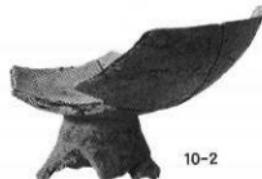
10-1



10-3



10-9



10-2



10-13



10-10



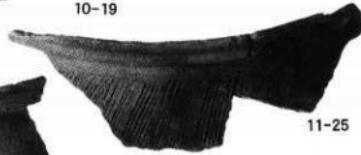
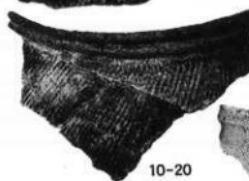
10-12



10-11

圖版 7

3 A 号住居跡出土遺物 (2)



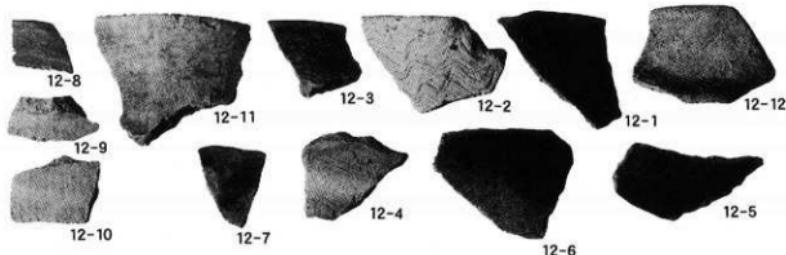
10-18

10-19



图版 8

3 B 号住居跡出土遺物



4 号住居跡出土遺物

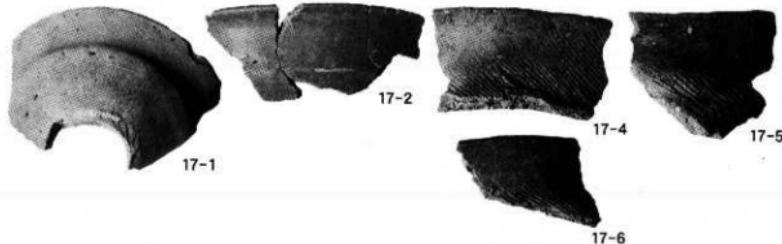


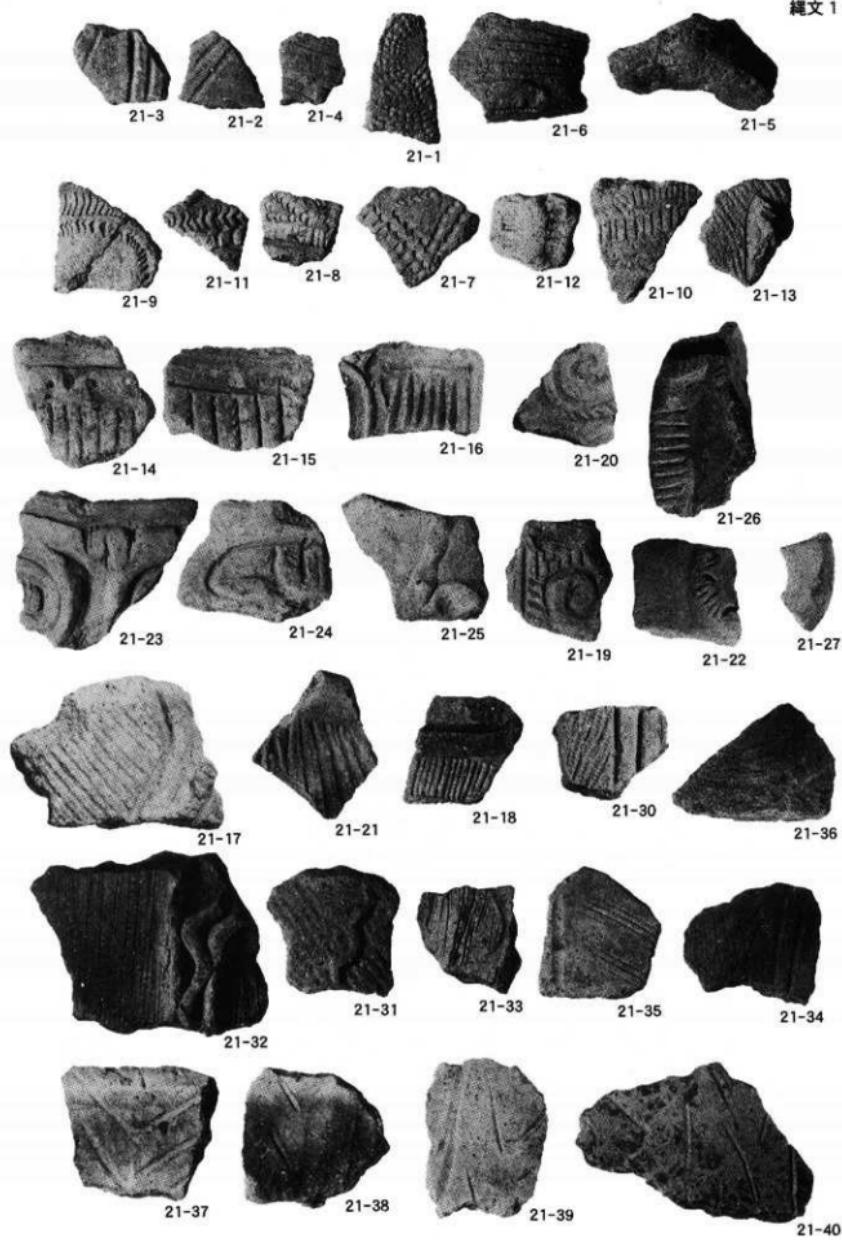
图版 9

5号住居跡出土遺物



2号方形周溝墓出土遺物

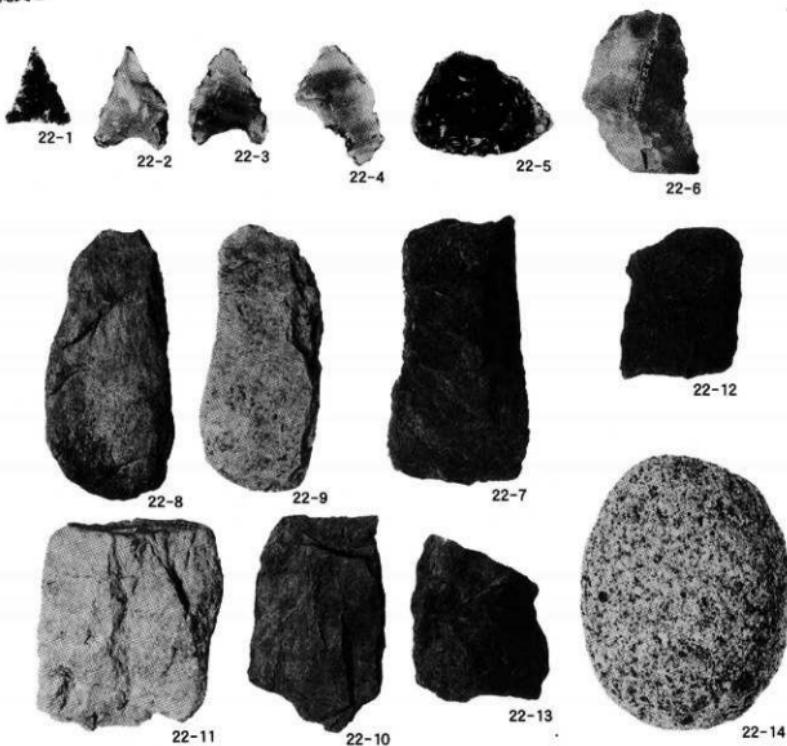




図版 11

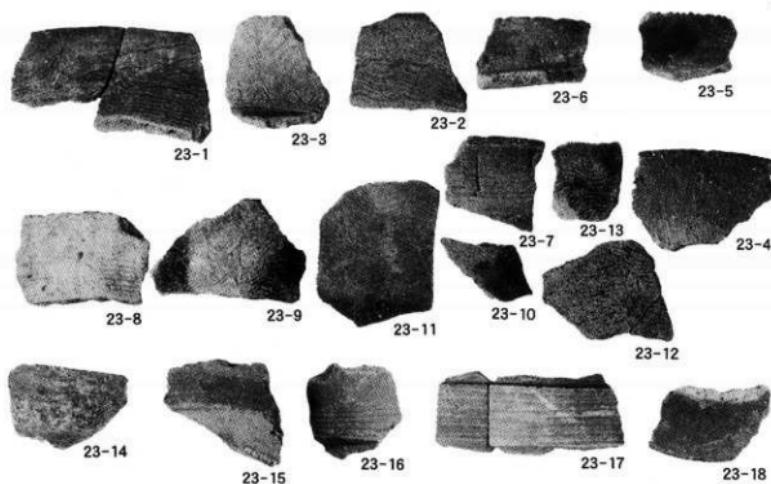


図文 2

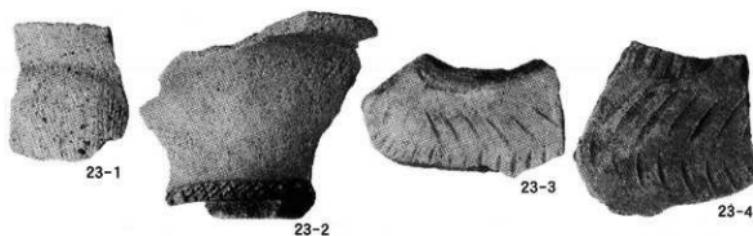


図版 12

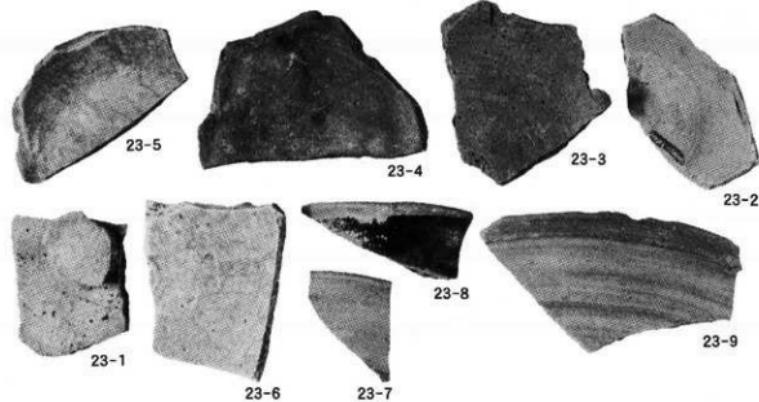
弥生



古墳

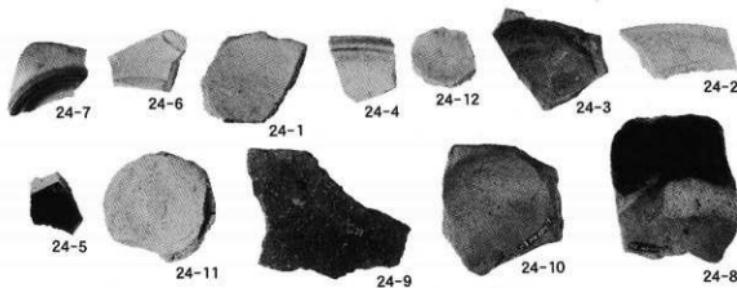


古代

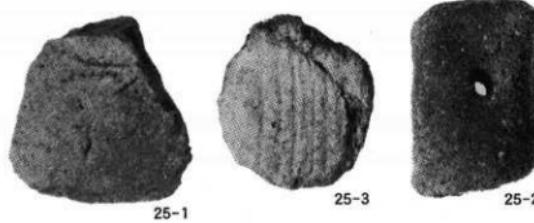
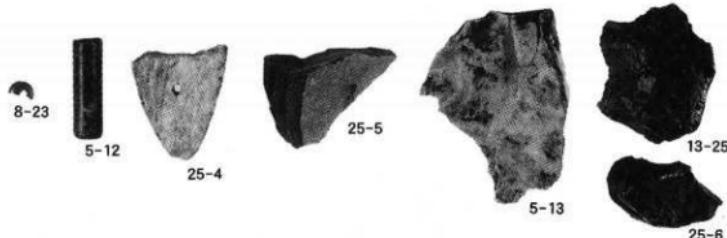


図版 13

中世



土・石・ガラス製品



報告書抄録

ふりがな	まっぽういせき							
書名	末法遺跡Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	15							
編著者名	三輪幸幸・大嵐正之・小坂隆司							
編集機関	敷島町教育委員会・日本窯業史研究所							
所在地	山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020 柄木県那須郡馬頭町小砂3112							
発行年月日	平成16年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まっぽういせき 末法遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 414-1外	193828	5			平成15年 3月31日～ 平成15年 5月2日	437	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
末法遺跡	集落跡	縄文時代 古 奈良・平安 中世	古墳 住居 跡 方形周溝 墓 潟 土 坑	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 中世土器 貿易陶磁器 石器 管 玉 ガラス小玉	古墳時代前・中期の集落跡。			

敷島町文化財調査報告 第15集

末法遺跡Ⅲ

発行日 2004年(H 16)3月31日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277-4111

印刷 御協和印刷社

